始

特233
987

美しき君よ今夜はこれで歸るのか　目次

美しき頁よ……一
晴れやかな微笑……一
鈴の樣な美しい聲……一〇
男性的な雄々しさに……一六
戀なき時の遣る瀬なさ……二六
よく若い青年の所へ……五一
面白い戀の經驗談……五八
或る月夜……六一

様々の物思ひよ……六三
瑞枝さん……六五
たゞ恍惚として……六八
一人は確かに令嬢……六九
失禮ですが貴女は……九一
樂しい夜のあの騒ぎ……一〇四
四邊の人に氣樂り惡く……一一九
心あり氣に見詰めながら……一三〇
白い指を私の膝へ……一五〇
感激に打たれた二人……一六一

貴方が遲いのよ……一六八
眞赤な唇を當てゝ……一六九
皮肉だわ其麼事云つちや……一七一
手と手が走り寄つた……一七四
雄姿見るからに豪快……一七四
貴女の好きな方は？……一七四
又逢ふを樂しみに……一七六
殘るは鼻つく脂粉の香……一七九
聖なる彼女……一八一
帝劇の夜……一八四

幕合の時に……一九五
感想……二〇五
最も樂しきもの……二〇六
最も悲しきもの……二二〇
或る女の手紙……二二五
倫敦の夜會……二四二
自由の天地……二六二
パザー見物……二八一
美しき君よ今夜はこれで歸るのか　目次終

美しき頁よ

己れは一度逢ひたい〳〵と思ふてゐた。
先方も一度逢ひたい〳〵と思ふてゐた。
そして互は逢はなかつた。
機は遂に來たれり。二人は嬉しくも玆に相見ることを得、相語らうことが出來た。己れは世の中に此の婦人あるを見付けたことを幸福に思はねばならぬ。
その機會は知らぬ、けれども近頃弟がよく御馳走になつたり、世話になつたりする一人の奥樣があつた。試みに名を訊くと有名なM男爵夫人であるとのことだ。己れは豫てからその男爵は二三度逢つて知つてゐた。そして其の奥樣の美しいことも耳にしてゐたが、意外や弟が其の奥樣から全で我が子か弟の樣に愛されてゐるとは夢にも思はなかつた。弟は度々招ばれては歓待を受けるからと云ふので、己れの新刊が出る度に其れを送つては心ばかりの返禮してゐた。

或日弟は己れを訪ねて來て、
「Mさん（奥樣）が是非君に逢ひたいと云ふんだが、何うだい？」
と訊いた。そして其の時Mさんは全で一見二十五六にしか見えぬ程美しいこと、才の秀でゝゐること音樂と云ひ筆の運びと云ひ、而かも又勝氣な裡にも本當に女らしい温かい穏かな柔かい感じを持つた云はゞ中分のない奥樣であることゝ附け加へた。更に此の奥樣は非常に青年を愛する氣質のある人だと云ふことも附け加へた。己れの好奇心はムラ〳〵と起つた。
「よし逢はう、何日でもいゝ」
弟は之を訊くと考へた。
「正直に云ふと、僕は君が逢はぬ方がいゝと思ふ、先方では餘程君を過信してゐるらしい。本では非常な美男子になつてゐるし、又辯舌も非常に巧みな樣に書いてあるけど、僕の眼から見たら少つとも美男子ぢやない、そんな男振りは

世間に松茸の樣にある。又君は默つてゐてこそ貴公子みたいな價値があるけど、喋べらしたら零だ、一言一句吶々と吃り、見てゐても咽喉を搔き拐つて遣りたくなる。僕としては逢はしたくないんだがなァー」

己れは一言も無かつた。悄々として、

「ぢや止めやうか」

と、憾めし相に云つた。

「然し君が逢つて置く可き女性だ、屹度いゝ材料にブツかるに違ひないんだ」

「ぢや逢はうか」

「さァー」

と、小首傾げながら、

「逢つた方が惡い樣に思ふし、善い樣にも思ふ、ま、もう少し考へさしてくれ」

斯う云つて弟は一旦歸つた。

それから遊びに來る毎にMさんが〳〵と話をした。此方の好奇心が切りに動いた。

「先方も逢ひたがつてゐる」弟は歸る時屹度斯う云つて行つた。

それから三ケ月程經つて偶然カフエバウリスタで弟に出會したら、

「僕は益々あゝ云ふ總てを完備した理想に近い奥樣は珍らしいと思ふ。先方も其れと明らさまに云はないけど、近頃又非常に君と云ふ人間を見たいらしい。だから逢つてくれ」

と云ひ出した。己れは「先方の都合さへ宜かつたら何時でもいゝ」と答へた。

そして今直ぐ先方の都合を訊いて見てくれと云つた。「ぢや左樣する」と弟は其處から電話をMさんへかけた。

折惡しく不在だつた。

「若し日が定まつたら直ぐ知らすから」

斯う云つて弟は別れて行つて了つた。

翌日まだるしと許り己れから電話を直接かけて見た。

「モシ〳〵奥様ゐらつしやいませうか」

と、女の聲がしたので、斯う訊いた。

「はァー、どなた様で？」

「私は湊の兄ですが」

「ハァ一寸お待ち下さい」

暫らく待つた。

「モシ〳〵」

「奥様ですか」

「はァ」

その聲が取次に出た其の聲とよく似てゐた、己れは奥様が最初電話口へ出た

んだが唐突に「奥様ゐらつしやいますか」と訊いたので、ツイ思はず「はァ」と答へた關係上、私がそれだと答へが出なかつた爲めか、又は一應此方の名前を確かめた上で、若し氣に喰はぬ人物であつたら其處等あたり旨く外す積りであつたか、さなくば一應たとへ本人がMさんであらうとも、M家の威嚴を持たす爲めに、一應取次が無くちや容易に電話口へ出る樣なことをしないと云ふ樣子を示す爲めに殊更一寸お待ち下さいと云つたものだと思考される程その聲が似てゐた。

「いつも弟が大變御厄介になりまして」

「どう致しまして、私こそ」

「實は昨日弟から電話をおかけした筈ですが、私し是非奥樣に一度お目にかかりたいと思ふてゐるんですが、御都合如何でせうか」

「それは本當に此方から左樣申上げる言葉でしたのに」

と、早くも謙譲な言葉で應じて相手の私に好感を齎らせながら、

「そのことで只今弟さんがお見えになつたんですよ、そして明後日ならと申上げて置きましたんですが、お差支へ御座いませんでせうか」

「はア別に」

「時間は何時頃が御都合宜しゆ御座いませうか」

「私は何時でも構ひませんが、奥様の方は？」

「私の方も幾時でも構ひませんが」

と孰方も明白云はない。

「それぢや私しよく考へた上で弟へ返事します、弟から奥様へ又申上げる様にしますから」

「はアそれでは何卒左様云ふことに」

「イヤ大變失禮いたしました。まだお目にもかゝらない程に電話をおかけする

なんて」

「まア其麼に仰言つて頂いては却つて恐縮の至りで御座います」

「では何れ又、左様なら」

「どうも恐入りました、それでは又、左様なら」

己れは受話機をかけると共に晴れやかな微笑した。弟にしろ妻にしろ己れが口拙手だ〳〵と攻撃するけど、この電話での應接を見ろ寸分の隙があるかいと鼻を撫でた。そして屹度先方では流石は他見男さんだ、下手に而かも優しく叮嚀な所、旨いものだ、と今頃は感心してゐることだらうと推量して、それが嬉しくなつたのだ。まだお互に顔こそ見せぬが少くも先方では初對面の印象よりも先きに先づ此の電話から得た好感が、己れと云ふ人間の印象を好くしたであらうと、自惚れた。

翌日弟から電話で、明日逢ひたいと云ふんだが君の方の都合は？と果して

きた。己れは既に考へて置いたから、三時に銀座の資生堂で待ち合はさうと答へた。弟は其れを早速先方へ通ずると云つて切つた。

○

愈々會見の當日である。己れは弟ばかりからでなくMさんは確かに代表的女性であると云ふことを耳にしてゐたから、どんな人かと好奇心は既に油然としてゐたんだが、今や此の日を迎へては流石に胸の躍るを禁じ得なかつた。恰もよし最新調の洋服が出來あがつて間もなくだつたから己れは揚々としてゐた。この洋服に就いて一言したい。

外務省のR君が過日夕刻「僕來月早々洋行するから、お暇かたゞ〳〵」と遊びに來た其の際、「君洋服を作るなら虎の門の段に限る。最新流行の型にそりや旨く慥へてくれる。外務省の連中は皆あそこだ。毎日の樣に英米から歸國する連中は今は斯うした型が流行る、今は斯うだと一々それを敎へて作らす、外務省

の連中と云へば洋服にかけては最新式の魁けだ。だから君も若し拵へる樣なことがあつたら段へ云ひたまへ」と、詳しく其の家を敎へて呉れた。

その段で拵へたのが此の洋服だ。成る程甲分がない。「己れは如何です？」と云はれながら着せられた最初の日、難の打ち所のない出來の旨さに惚れ〴〵する樣に見入つてゐると、横にゐた友人の一人が、

「成程立派だ、然し其の洋服にその靴はあまり貧弱だね」

と下を見ながら云つたので、己れも足元へ眼を落すと、赤靴はもう傷だらけになつてゐた。「其の靴が宜かつたら、それでこそ天下の他見男さんだ、どこへ出しても恥かしくない。さうなつたら兎ても氣恥しくて僕等は君と一緒に歩けない、ひどく見劣りするから」

と、本當らしく潘してた。己れは然う云はれると急に靴が欲しくなつた。早速之も注文した、靴は昨日出來あがつた許りだ。

此の洋服に此の靴！それに少し年齢老つたので顔は近頃少々氣に入らんが、それでも矢つ張り此の男振り!!さァ矢でも鐵砲でも來いッ。己れはニコ〳〵して時間を待つた。

然るに何んと云ふ無情なさであらう、先日から晴天通しであつたのが、今朝ほど怪しい空だナと見上げてゐたが、何れ其の裡晴れるだらうと思ふてゐたのが、反對に一滴二滴ポツリ〳〵と降り出したかと思ふ間もあらせず軈て車軸を流さむ許りの豪雨と化した。豪雨は暫らくにして過ぎたが、然し小歇みながらも雨は止まなかつた。

己れは空と見較べては新調の赤靴を出したり引込めたりしてゐたが、到頭此麼日に此の靴を履いて出たら一べんで代無しの運命になる。折角最上の他見男さんを見せ付け樣と思ふてゐたが、何が不幸になるか解らぬものだと恨めし相に潘しながら、到頭その最新式の服には不似合な黒靴を履かざるを得なかつた。

然し己れは斯う思ふた、若し赤靴を履いてゐる時だつたら、出來る丈け之れ見よがしに足を前へ投げ出して居る積りだつたが、今度は反對に足を出來る丈け引込めて居ればいゝ、要するに足に注意を惹かれ無い樣に心掛けてゐたら、他見男さんの遜色問題には多く關せないことだと合點して、その方法に據ることにした。

更に雨の爲めに餘計な心痛が一つ增えた。それは洋傘のことである。

己れは學生時代から一體に何事にも無頓着で割合に平氣な性なんだが、ヤレ紳士らしくもない、ヤレ貴方みたいな方がと云はれる度に仕方なしに智惠の附くことが多い、洋傘も左然だ。己れは洋傘と云ふものは殆んど平等な品とのみ思ふてゐた所、木綿張りと絹張りとあるんだ相な。そんなことはよく知らなかつたものだから、イヤ知つてゐたかも知れぬが、同じ黑い色なら、そして同じ雨をしのぐことの出來るものなら、更に又高いものなら永持ちするかと云つた

ら、左樣でもなく矢つ張り同じ年月しか持たないものであるんなら、高價いより安いのがいゝと思ふて常に木綿張りを買つてゐた。それが不可ないんだと云ふ、何故不可ないのかと訊くと、紳士が醜いぢやありませんかとある。二言目には紳士がとくる。此麼事には無頓着な筈の弟までが「君の洋傘はヒドい」と云ふ。そして一本新たに買へと云ふ。己れは確かな否絹張が木綿張りよりも總てに於て超越してゐると云ふ正當な理由なしに、單に體面上ばかりの問題から何うしても三倍も四倍もする絹張りを買ふ氣がしなかつた。こんな事には己れは剛張だ。

然し今斯うして雨が降ると、總てに細かな注意を拂ふ女の常として、Mさんに必ず此のみすぼらしい洋傘が眼に付くだらうと思ふた。己れはそれを發見された時初對面の己れを其れが爲め傷けやしないだらうかと慮られた。少くも總てに於て好感を以つて迎へられたき己れは此麼詰らぬ心配して自分自身を苦し

めた。

然し矢つ張り買ふ氣がしなかつた。何うかして雨が晴れ上がつてくれゝばいいと空ばかり睨んでゐた。それも遂に無駄に終つた。己れは出來る丈け此の洋傘の存在を相手の眼から外れる樣に工夫するより仕方がないと諦めた。そして出かけた。

新田浦から新宿へ、新宿から銀座へと電車に搖られてゐる間に何時の間にか雨が小歌みになつて、强ひて洋傘の存在を必要とする程でなかつた。之ぞ天の與へと、銀座尾張町から資生堂へと歩く途すがら、知合の某店へ立寄つて其の洋傘を預かつて呉れる樣に頼んだ。

「えゝ、お容易い御用です」と云ひながらもまだ小糠みたいな雨が降つてるのに何うして此麼ことを云ふんだらうと屹度そこのおかみさんは思ふたに違ひない。然し先づ己れとしては之で大安心だ。さ、イソ〳〵として行け。あとは古

靴を見つからぬ樣に椅子の下へ捻ぢ込んで置けば其れで非難の程微塵も御座なく候也。

○

資生堂へ入る時、己れはにこやかな笑みを作つた。之も近頃考へた方法である。己れは之れまで幾度も云つてるが、凡そ初對面ほど相手に印象を深く與へるものがない。最初ブツリとした顏をしてゐたら、必ず其の人間が打解け難い樣な、近づき難い樣な、同時にむつり屋の樣にピカツと來る。それに反してにこ〳〵、にこ〳〵笑みを含んでゐると、第一に親しみを、第二に馴れ易き、最後に恰も舊知であつたかの感が深いものだ。己れは或る知名な人が客に接するに、その客の如何に關はらず必ずニコ〳〵笑みを含んで近付き、始終笑顏を持つて會談してゐる樣子を見て、之れ大に學ぶ可きことだと思ふてゐた。

それを思ふて最初の日が此の初對面だ。だから己れは其の例を倣うて、務めて笑顏を作りながら入つて行つた。

見ると、後向きながらも弟が一婦人と話合つてゐる姿が眼に入つた。と同時に此方へ向いてゐた先方の婦人の眼はヂツと己れを凝視した。己れは笑顏をヨリ一層笑顏にしながら近いて行つて、輕く弟の肩を叩き、今度は此方から、

「やァ奥樣、私が」

と、叮嚀にお辭儀した拍子に弟は己れを仰ぎ見て、

「オー僅つた今來た許しだ、恰度よかつた」と云ひながら、

「奥樣、兄です」

と紹介の腰を上げると、

「えゝ、もう此處へお入りになる時に、直感的に左樣ぢやないか知らと思ひました。」

「矢つ張り、すると何處か弟と似てる所があるんですね、ハッハヽ」

と云ひながら椅子に坐ると、

「奥様、兄は仲々自稱美男子で。實際は此麼です」

と、有りの儘な所を正面に披瀝しながら、今度は僕に、

「此の奥様は才色兼備だよ」と改めて又念を入れた。

「まア湊さん其麼に仰しやるものぢやありませんよ、お兄さんが挨拶に困つてらつしやるぢやありませんか」

と、彼方も己れに負けないにこやかな表情を以つて立上がり、「どうぞ宜しく!!」

「いゝえ私こそ左様申上げなくちやならぬでしたに」と早くも先鞭を付けられてタヂ〳〵としながら己れは少し狼狽して首を下げた。

「何を注文したのかい?」

と、再び坐りかけながら弟に訊いた。

「いゝや未だ」

「ぢや」

と云つて、折柄そこへ來たボーイに珈琲を命じ、さて奥様の方を向いて、

「いつも弟が色々御世話になりまして」

「いゝえ、私の方こそ、子供が大變可愛がつて頂いてまして」

と、この所月並みな辭令交換の後、

「實は晴れて呉れたら〳〵と思ふてゐましたが到頭降り出しましたね」と己れが云ふと、

「えゝ、ほんとうにガッカリしましたよ、でもお逢ひするのを樂しんで來ましたし」

と、早くも柔かい、をだやかな感じを私に見せた。「でもお逢ひするのを樂し

みに」と輕く何等の世辭なしに口から出る所旨いものだナと己れは感心して思はず心の中で「旨い！」と叫んだ其の時、「ヘイお待ち遠さま」と云ひながら、ボーイが注文の品を運んで來た。一同はそれに咽喉をうるはしてゐる時、突然弟が、

「ねえ君、今日は奥樣はひさしだけど、日本髪に結ふたらそりや似合ふんだよ。素敵なんだ、それを何うしたのか今日は」

と云ひながら、奥樣の方を向き、

「奥樣何うして今日は日本髪に結はなかつたんです？」

「あれですと、目立つて電車に乘つたりすると皆んなでヂロ〳〵私の顔を見るんですもの、それが厭なものですから」

「人目を惹く丈け似合ふからです、」

と弟は應じて、更に、「全くあの時は素敵だ、天下の美人になつて見えるんだ

もの！」

「まア湊さん！」

と、少しく矯める様な眼付。その眼の美しさ!! 滴るが如き愛のある、そして親しみが溢れてる様な中に惹き付ける様な力を持つた眼のあたゝかみ！あゝいゝ眼だ、實にいゝ眼だと己れは恍惚して見入つた。

「奥様は今日は態々斯麼目立ぬ風をしてお出になつたんだけど、平生はそりやもう形容の出來ない清麗な」と弟は猶も續け様とするから、己れは其れを直ちに引取つて、

「イヤそれよりも赤裸々に云ふと、奥様を一眼見た切那、私は云ふに云はれぬ何よりも親しみを覺えた。恐らく其れは柔かい眼の力でせう、」と、二人に云ふ様にして云つた。

「左様ですか」

と、羞恥の裡に、つゝましき微笑を湛えながら、奥様は

「私は只今の親しみがあると云はれた言葉ですつかり満足して了ひました。解しも初對面の時相手の方に嫌な印象を持たれたくないものですからねえ——」

「私は本當に眼に依つて其の人の心が判斷出來ます、奥様は確かに、よい心の人に違ひない、少くもひがむだり曲がつたり又虚言の言へぬ美しい所を持つてゐらつしやることが解る」

と、斷言した。

「えゝ確かにそれは當りました!!」と何か云はうとすると、

「奥様、兄の人を見る明だけは感心です。ピタリと當るんですから」

と弟は横から口を出した。

「そりや全くです!」

と、己れは自信があるものだから、自らを賞め、

「さて奥様」

「えゝ」

「今日はゆつくりなすつてもいゝんでせうね」

「えゝ、今日はもう時間を空けて置きました位ですから」

「左様ですか、それなら何處か靜かな所で」と云ひながら、

「ぢや君、君はもう歸れ、己れは奥様と二人限りになるから。」と弟に云つた。

「そうか、ぢや僕は歸る。奥様僕お先きへ失敬します」

「ま、お兄さんも淡泊したことを仰しやいますねえ」

と、餘りに突飛な言葉に驚いたらしい。

「もう紹介が濟んで終へば一見舊知ですから、弟なんかゐなくたつて」と己れは笑つた。弟も自分が傍に附着いてゐちや何かと二人の話しに實が入り難からうし、又二人は二人だけで話もあるだらうから、それには自分が傍に控へてゐ

ちや自分に對する遠慮から、思ふことも充分口から出まいと察したらしかつた。又全く奥様も己れも此の際、弟が傍にゐちや萬事に修飾を以つて應對の言葉を交はさ無くちやならぬ羽目に陷づて何んとなしに物足りなさが互の心に渦巻くに違ひないと云ふことは解つてゐた。然し先方から弟によもや貴方は避けて下さいとは何うしても云ひ得ない言葉である、何故ならば彼女は女であり、又いくら馴れてゐるとは云へ兄弟の己れほど馴れてはゐない。だから此の空氣を察して、己れから氣轉を利かすのが當然であつた。奥様も弟が去ると云ふことに就いては強ひては引き止めなかつた。

「ぢや失敬」

と、彼は無造作に己れに云つて立上がつた。

「まア矢つ張りお歸り？　それぢや又お遊びにゐらつしやいな」

斯う云つた優しい言葉で奥様は弟を見上げた。

「ウン、左様なら」

と、弟はブツキラ棒に答へて出て行つた。然し内心必ずや此の浸み込む様な温かい柔かい言葉に云ひ知れぬ感激を覺えたことだらうと弟の情に脆いことを知つてゐる己れは推されずにゐられなかつた。ズツと後を見送つてゐた奥様は

「本當に私しあの弟さんの性質が大好きなんですよ!!」

と云ひながら腰を下ろして、

「武張つた様ですけど、仲々濃かな情のある方ですねえ」

と、己れを見た。

「左様かも知れません、そんな所がありますし」

と、己れも其れに異存を云はなかつた。

「本當にいゝ方ですね、」

と、泌々と肺肝を出づる聲で奥様は又賞めた。

「奥様、私しどこかで泌みりお話しゝたいと色々の方面を物色したんですが、どうもいゝ所が思ひ付きませんでした。如何でせう銀座の裏町に貸席がありますが、そこへ御案内しても差支へませんでせうか」

「えゝ何處でも構ひません」

「ぢや其處へ參りませう、極く靜かですから」

と、云ひながら「それでは」と云つて己れは立上がつた。奥様も立つた。

○

「まアよく被居いました」

と、通された部室は階下の八疊だつた。

「二階の方は？」

と、己れは二階の六疊が好きだつたから、それを飽ねた。

「お生憎様で、今しがた御客様が見えた許りです」

「ホー、どんな方」

「愛國婦人會の方で御座います」

「ぢや女の人ばかりだね？」

「ハイ、何か御相談があるものと見えまして、」

「幾人？」

「お二人さまで御座います。……濟みませんが今日は此方で我慢を願ひます」

と、云ひつゝ女中が隅から坐布團を運びながら改めて「よく被居いました！」茶と栗羊羹が運ばれた後、

「御用が御座いましたら何卒お呼び下さいまし」

と、女はスーッと下がつて行つた、あとは二人限り。

「奥様寂かな場所でせう？」

と苔蒸す庭へ眼を遣りながら、云つた。

「まア本當に寂かな場所ですね、銀座の近くに此麼所があるとは少つとも存じませんでした」

と、四邊を見廻はしながら、

「いゝ家ですね」

と、一しきり感に入る。

「さて奥樣、私は今から何んでもさらけ出してお話しゝようと思ひます。要するに奥樣が名高い男爵の奥樣であると云ふことも、女であると云ふことも、そんなことに顧慮なしに、唯一人の人間——女性男性の區別なしの云はゞ中性の方に話をすると思ふて話をします、でないと面白味が無いと思ひますから」

「えゝ、それは私の方からお願ひすることでした、それで無くちやお互は本當に解け合ひませんからねえ」

と、心からそれを喜んで受けた。

「一體それよりも奥樣は私に逢ふと云ふことに就いて何うお考へになつてゐました？　先づそれからお訊きしたいと思ひますねえ」

「何うつて別に」

と、此の問ひが餘りに突然であつたので、一寸躊躇したが、然し直ぐに打ち明けの態度を見せて、

「有の儘申上げますと、貴方は湊さんのお兄さまですから、どことなく私は未だ見ぬ裡から好きでした。何故かと申しますと、湊さんは私し大好きなんです。本當に飽く迄も男性的な蠻殼な、そして仰しやることが明瞭してゐて少つとも厭味も氣取りもありませんですもの。それ許りの人ぢやありません、内的に非常に涙脆い優しい情を持つてゐらつしやる方です。湊さんは兄は私と性格が大分變つてゐますよと仰言しやつたけど、私は屹度どこかに共通點があるに

違ひないと思ふてゐました。それを樂しみにしてました。だから貴方には最初からお逢ひしない前から既にいゝ感じを持つてゐました。」

「そりや」

と、己れは頭掻きながら、

「いゝえ全く弟の云ふ通り、弟と悉皆性質が變つてゐますから。私の方が大分惡ずれしてますから其のお積りでゐて下さる樣私から最初お願ひして置きます。

「いゝえ、左樣ぢやありませんねえ、」

と、それを打ち消しながら、

「私は貴方の（君と別れて松原のけば）の中の紀彈と云ふお筆を讀んだ時に、湊さんとヒドク共通してゐる御性格を見ました。負ッ嫌ひな男性的な雄々しい中にも溢るゝばかりの優しい情のお有りになるのを發見した時に、私はハラ

ハラと落涙しました。そりや成程湊さんと變つた御性格もお有りでせう、然し燃ゆるが如き叫びの中にも、白百合の樣な至情のある所は先刻からのお話の御樣子の中にもお伺ひ知ることを得ました。矢つ張り私は紀彈の記事で得た印象を今眼のあたり貴方から感受することが出來ます、本當に貴方の御兄弟は何方も淡泊した、そして口の重い所や快活な所、情け深い所がよく似てゐらつしやいますよ」

「そりや奥樣はいゝ所ばかり見てゐらつしやるからです。少し惡い所に注意して下さい、欠點だらけの男ですよ」

「私は人の惡い所を見る必要がありませんと思ひます。私は人の惡い所を見ることが大嫌ひです。いゝ所いゝ所と狙つてゐます。そして其處から何か知ら自分は益したいものと思ふてゐます。それで良いぢや御座いませんか」

己れは一言も無かつた。果然明達な奥樣の美しき人格の閃めきは先づ此處で

ピカリと光つた。

「さて奥様、私は愈々中性のお方にお話しするとして話します」

「えゝ」

と、美しい瞳は惹く入るゝ許りにヂッと己れを見入つた。

「奥様、奥様は世の中に此麼男もゐるものかと云ふ意味でお聽きになつて頂きたいのです。私は恐らく一生戀で終りたいと思ふんです、戀は人間の糧である力であると思ひ込んでゐます。ですから私は私の周圍に女がゐない時を思ふと、堪らなく淋しいし、又傷ましき許りに悲觀してゐます。私は始終ハチ切れ相な熱烈な戀をしたいと思ふてゐます。戀のない時の遣る瀬なさ、何んの爲めに生きてゐるのかとさへ思ふことがあります。

所が近頃私は漸次年齢を老つて參りました、同時に若い女から次第に遠ざかつて行く樣な心がします。否相手にされぬ樣な氣になつて來ますから、あゝ

何うかして此の未だ若さの殘つてゐる此の身體で、もう一度たまらない許りの熾烈な戀をしたいと其れに悶へてゐます。

ねえ奥様、私は人間と云ふもの、否男と云ふものは何麼男でも表面豪相なことを口にしながら、裏面には皆麼女の爲めに苦勞してゐることをッく〳〵見聞しました。私は世間で日本知名の紳士と唱はれ、其の上白髮交りの年配でゐながら矢つ張り背面に女あることを知つて、呆れるよりも先づ今では其れが普通と思ひました。否世間から唱はれる程の紳士や人物には必ず妻以外の女が附着いてゐるものだと確信してゐます。女――つまり戀です、して見れば私に限らず一般の人物は擧つて年配の多寡に依らず戀を唯一の糧としてゐることは疑ひもない事實であります。

そりや奥様の御主人の樣に、世に聞えた學者の方は別ですけど。……いや學者でも目的になりません、私は屢々海外の友人から手紙を受けてゐますが、巴

里にしろ倫敦にしろ、日本の留學生で最も足繁く暗黒面へ通ふものは誰かと云つたら、先づ第一に學校の教授だ相です。先日も巴里からの通信に依ると「某君の如きは△△高等師範學校教授と云ふ肩書あり日本では女に對しては人格の典型の樣に嘔はれてゐる人が毎日毎晩今日も行かう、明日も行かうと誘ひに來るには閉口仕つた、之で國へ歸れば謹嚴な顏で「貞操に就いて」などゝ鹿爪らしい講義をするんだから堪つたものに御座なく候」とありました。要すると大概の學者の心を割いたなら、彼等も屹度機會さへあつたらと始終狙つてゐるんです。所で本國にては何んのかんのと喧ましいから、ヂッと我慢してゐるのに過ぎないのであつて、云はゞ教育家であると云ふ體面上、好きな女が傍へ來てもムツリとした顏してハア〳〵云つてゐるけど、一歩足が海外へ飛び出すと皆この通りですからねえ。ツイ先日桑港へ着いた許りの男からも手紙があつたですが、それを讀むと「船中に美人三人あり、船が横濱を出た翌日から男共寄る

と障ると此の女の話に夢中、就中T教授の如きは白髮頭を振り立てゝ其の夢中の親玉にて御座候」とあつたのに見ても如何に學校の先生でも當にならぬかが解ります。要するに女戀しいと云ふことに大臣なく學者なく實業家なく、これ男子通有性らしいのです。

私は一通りのことを味はつて見ました。貧苦から次第に登つて、今では悉皆富者と云はれる人の遊ぶ所まで遊んで見ました。彼等は最初先づ金を拵へる、次に家を建てる、別莊を作る、土地を買ふ、それから屹度女であります。氣の早い連中はまだ碌に家を建てぬ先きに女へ來て了ふ。私は若い青年の時に妾を持つたりする樣な人間を犬か畜生の樣に思ふてゐたが漸次年齡老つて來るに從ひ、それ位の餘裕ある身分にならなくちや眞の紳士ぢやないのだと云はゞそれが出世の標準の樣に思はれて來た、情けないぢやありませんか、情けないけど實際ですから致方がありませんねえ——。

例へば此處へ高等學校以上の學生――殊に社會へ出るに近い大學生の賴しい連中が集まつたとする、彼等の話は何んだとすると、恰んど九分九厘まで女の話です。とても此麼ことは中學校にゐた時や、又高等學校の初級程度時代の純な氣持の時に夢想だにし得なかつたものです。もしそれ若い紳士、中年の集り賴しい半老人達の集り、彼等は時には低く、時には高らかに恥かし氣もなく女のことを口にして愉快を得てゐるのであります。

此麼ことは奥樣に云ふたつて兎ても信じ得られますまい。屹度奥樣には悉皆者は奥樣から好き感じと、紳士らしいと云はれたい批評を得たい爲めに巧みに自己を粉飾して話合つてゐるから、この裏面は恐らく御存知なからうと思ひますが、何うですか?」

「いゝえ私はもう大慨男の方と云ふものは其麼ものだ位は知つてゐます、だから別に驚きもしません、そりや私ももう此の年配ですから色々の事を聽かされ

てゐます」

と、賢明なもの。酸いも甘いもよく知つてた。

「貴女は私から思ひ切つた此麼話を聽いて私に對する侮蔑を感じませんか。」

「侮蔑?侮蔑どころか流石は失禮ですが他見男さんだ豪いと思ひます。何故なら思ひ切つて仰しやる其の度胸が垢抜けしてます。大低の方は斯麼ことを云つたら、屹度女から愛憎をつかされやしないだらうかと、いゝ加減な修飾を施して口の先きばかり巧みに云つて退けます。然し貴方は何もかもさらけ出して、さア此麼話を聽いて愛憎が盡いたかアハッハヽヽヽと云つた樣な何處となく超然的な所が浮び出てゐます。斯う申しちや失禮ですが私は氣に入りましたねえ――。私は豫想してゐた御性格を眼のあたり見る樣で愉快でなりません」

と、彼女は心から此の聲を發した。己れは又これ程理解のある婦人ならと賴もしく思ふた、斯麼極端な話を喜んで耳を傾けて聽く丈け此の人は落着いた所

と、修養を積んでゐるのが堪らなく嬉しかつた、己れは一面に於て此麼女の友達が欲しかつたのだ、弟はいゝ方を紹介して呉れた哩。

「奥様、奥様はよく若い青年の所へ遊びに被居る相ですね。それは矢つ張り自分が漸次年齢を老つて行く淋しさから若い心を慕ふ爲めでせうか、それとも戀でもして見たいんでせうか」

己れは思ひ切つて斯う訊ねた。すると奥様は微笑の下に之を受けながら、

「私は其麼目的で若い方達と親しくするんぢやありません、私は成程よく行きもします、又自宅へ遊びにも被居います。別に若い心を得て滿足したいなどゝ云ふことなしに、その人達に色々御馳走でもすると、皆さんが「やア」と雙頰を崩しながら無邪氣に天眞爛漫にお喰りになつたりするのを見てゐるのが、何よりも愉快なのです。それ丈けですわ。

然し私には本當に烈しく好き嫌ひがあるんです、嫌ひな人を見ると言葉交は

すのも厭なんです。その代り好きな人だと本當に我が子の樣に可愛ゆくなります。湊さんなんか其の方で、私し大好きです。湊さんも私を好きなんだ相です。それで先日も私し湊さんに何麼お嫁さんを貰ふんですかと訊きますと、「さうですねぇ」と云ひながら、奥樣を若くした樣な人があつたらと云ふんでせう、何うして私が其麼に氣に入つたの？と訊いたら總てが理想的だからと仰しやるんでせう、オヤ〳〵どうも難有う御座いますとお禮を申上げて置きましたわ。本當に好き嫌ひを極端に顔に現はすことは惡いことですね、でも仕方がありません、之は私の大きな欠點です。

それに私は虚言を云ふことが出來ません、先日も或る會合の婦人會に他所へ呼ばれた時に珈琲が出ましたから、それを呑んだ所イヤに苦かつたものですから、思はず顔を顰めて「まア拙い珈琲ねえ」と言ひました。すると横の方がまア奥樣主人役が傍にゐらつしやるぢやありませんか、聽えますよと注意なさる

んでせう、で私し云ひました聽える樣にと思ふて大きな聲で申上げたんです。

私は裏へ廻はつて色々なことを云ふことは厭ひですから眞正面で申上げるんです。そうでせう拙いものを旨しい旨しいと僞ついて呑んだら、此處の奥樣は又外の會をお開きになつた時、先日の珈琲は皆さまに賞められたからつて、之みたいな苦い味にされちや、後の方がお氣の毒ですわ。左樣ぢやありませんかと其の注意された奥樣に答へたら、私は兎ても云ひ得ませんと笑つた後で、貴婦は屹度苦勞も何も知らずに今日までお育ちになつたんでせうと仰しやるからえゝそうですと有の儘答へると、眞直にお育ちなつたから其麼事が正直に云へるんですと云はれました。」

「私も先刻から奥樣の顔付で、もう此の方は小さい時から苦勞なしに育つて來た人だと解つてました」

「よく皆さんが私の顔を見て左樣仰しやるんですよ、何うして其れが解るんでせう？」

「どことなく。生活に苦しむだ人の顔と、何等の不自由なしに育つた人なんか自然に判りますね。それは左樣と奥樣は屹度面白い戀の經驗がおありでせう？」

「所がありません」

「そんな事は無いと思ひますが、その眼と其の顔、そして其の美しい聲でそれは否定出來ません。若し何等戀の經驗なくして結婚なすつたものとしたら確かに不幸ですね、奥樣は今の御主人と戀で結婚なすつたんですか」

「いゝえ」

「戀なしに此の一生を終ると云ふことは何んと云ふいたわしいことでせう」

と、本當に此の人は戀なしで濟むだ人かと許り己れは不思議相に顔を見入つた。

「そりやね成程未婚時代には色んな男の方から何本となしに手紙を貰ひました

けれども多くは見ず終ひます。私には小さい時から男と云ふものが異性である
と云ふ強い觀念が無かつたんですね。誰れでも皆友達の樣な氣がしてました。
だから手紙を呉れたりすると、何を書いてるのか馬鹿だねと可笑しくなつてる
ました。男が女に女が男に熱中して其れが何が面白いのかと小首傾けてるまし
た。一つは其麼風に育てられたんですね。それが性格になつたんです。ですか
ら私は燃ゆる情熱を無理に壓へ付けてゐて戀をしなかつたのなら、そりや屹度
此の年齢になつて後悔もありませうけど、其麼風に出來あがつて來た人間です
から、何んとも思ひませんよ」
と、成程と頷づかしまねば止まない。己れは性格が左樣なら、さうかも知れ
ぬと思ふた。さるにても縱から見ても横から見ても情味嫋々たる風情に似合は
しからざる内面組織だナと思ふた。屹度この情味は恐らく美しき愛のみで堅め
られてゐるものかも知れぬ。己れは世間には外見と違つて此麼女もゐると云ふ

美しき頁よ

一つの經驗を今眼のあたり見ぜられた。

「湊さんは今年御卒業ですね」

「えゝ」

「何んになるんでせう?」

「司法官になると云つてました」

「あッ私にも何日か其麼話でした」

「蓋し適材でせう」

「屹度いゝでせう」

「殊に檢事になつて、堂々辯護士と爭そふと云ふ意氣込ですから」

「あの身體と、あの聲なら」

と、奥樣まで大に湊の前途に期待を持つてゐるらしい。

こんな事を話てゐると、はやく湊が卒業して檢事になり澄した顏付を見たく

なつて來る。

「奥樣のお子息さんは帝大だ相ですね、法科ですか」と、鋒を新たにした。

「えゝ」

「ぢやそろ〳〵年頃ですね」

「私し始終申してゐるんです、お前ももう何んでも解る年頃だから、云つて聽かして置きますが決して飛んでもない女には引つかゝつては不可ません。若し相當の者が見付かつて何うでも其れと一緒になりたいと云ふんであつたら幾程でも一緒にして上げますから、恥づるが如き相手を求めるな、たゞ母として云ふことは之れ丈けだ。私は若いものゝ立場なり心をよく知つてるから、何事も隱さずに私に相談してくれと云つてあります。子供は此麼理解のある母を持つてゐることは幸福だと始終喜んでくれます。全く父なり母と云ふものは血の冷却した年頃を以つて若い者の心を左右しやうとするのは好くないことゝ思ひま

す、だから若い者に對しては自分達の若い時の頃を追想して同情して遣らなくちや可哀想ですよ」

「同感ですな。先日も一女學校の先生が其の女學生が男の學生と歩いてゐるのを見て火の如くになつて怒つた相です。すると其の女學生は先生、先生のお若い時のことを考へて下さいと云つたら、その先生グッと詰まつた相です。痛快な女學生ぢやありませんか、私も小さいながらも娘がゐますから、後日大に理解した父となつて遣らうと思ふてゐますよ」

「貴方なら寧ろ理解仕過ぎてゐてお孃さまの方がお困りでせう」

と、奥樣はカラ〳〵と高らかに笑つた。

それから已れは或る名優から直接聽いた或る話をした。

その名優が或る日客に連れられて、大阪疊屋町の小山と云ふ料理店へ行つた時に不思議な女に紹介された。その女は年齢の頃卅一二、水も滴らむ許りの美

しさであつた。色々話合つてゐる裡に女は素性を名優に悉く打ち明けた。

「私は七人の番頭と十四人の子僧を使ふ或る店の女主人であります、その私が目下折角男狂ひをしてゐます、男でも普通の素人の人は眞平。あらゆる女と云ふ女を欺し盡し、女と云ふものを苦しめ拔いた男をと所望してゐるんです、先づ斯うなつた譯を訊いて下さい、

斯う云つて杯の一杯をグッと呑みながら女は膝を勸めて、物語つた。斯うである。

女は以前大阪の南地に藝者をしてゐた所、或る男から落籍されて道頓堀の近くに妾宅を構へてゐた、男は日夜暇ある毎に通ふた。所が其の男、月に一度は必ず東京へ出た。最初の間は少つとも怪しまなかつたが、漸次樣子が變なので、或時女はフイに上京して彼の宿を訪ねた。すると其處に其の男と美しい女が夫婦の樣に睦まじくしてゐたのを見た。彼女は怒りに猛る心を無理に靜めて「そ

の方は誰ですか」と訊いた。先方の女も亦男に「此の方は誰ですか」と訊いた。男は進退動きが取れなかつた。そして遂に「お前は大阪での俺の大好きな女」「お前は東京での俺の大好きな女」と白狀した。そんな勝手な寢言があるものかと二人は二人で、斯うなつたら男から放れたら損だと便所へ行く時まで附着いて放れなかつた。

男も之には泣き面した、到頭兩方を說明して、一軒家を借り、二階は東京の方、階下は大阪の女として同居させて置き、その中に男は起居してゐた。

所が其の宿の東京の女は、それは〳〵大阪の女に優しく使へた。一二もなく嫂さま〳〵と侍いた。それは本當に心から出る眞心であつた、斯くすることが一ケ年ばかり、少つとも其の態度に變りなきを見て、大阪方はすつかり感激して、或日男に向つて、「私は潔よく退きますから何卒あの方と仲よく暮して下さい。その代り大阪の店をあの儘すつかり私に下さいませんか」と云つた。兩方

責めに逢つて困り拔いてゐた男は、之れは忝けないと許り喜んで其の需に應じた。斯くして女は大阪へ歸り一切を引受け自ら主人となつて采配を振つた。

それから其の女は男と云ふものにッく〴〵愛憎が盡いて、又と旦那と云ふものを持つまいと決心した。然し最早男と云ふものを知つた年頃は時々彼女を淋しくせしめた。

或る月夜、彼女はホンノリ薄化粧して、淀川縁へ來た。そして舟を呼んで、川の眞中へと棹さゝしめた。時はもう大分時間が過ぎてゐて他に舟と云ふものは何物も見えなかつた。その頃になると女は船頭に酒を勸めた。

船頭は最初呼ばれた時に、オウと返事をしながら其の聲の主の傍へ行つた時に、先づ其の年若き女であることに驚き、次に餘りの凄艶さに又驚いた。恰も化身が現はれたものか、それとも身分ある人が、つれ〴〵の餘りの舟遊びと見て、近寄るさへ且つ怖れ且つ恥ぢてゐた。その女から「酒を」と勸められて感極

まつた、酒すゝむに從ひ（以下中止す。）

それから船頭は五十の年齢あまりながら南國の青年の如き戀を覺えた。その戀に堪え難くなると船頭は彼の女の家へ電話した、女は出かける時もあつたが、多くは不在を裝ふた。

船頭は遂に物狂はしきまでになつて、時にはあらねことまで口走り、遂に妻子を殘して、發狂して自ら思出の淀川緣から身を投げて死んで了つた。

之を聽いた時、ック〳〵女は物の哀れと悲しさを知つた。あゝ私は最初男の爲めに迷はされ、今度は遂に男を迷はした。そも〳〵何んの因果か。これから決して戀するな、戀するな。然し私の此の容貌は必ずや多くの男を惑さずには措かぬだらう。よしさらば來れ、男よ、あらゆる女を蹂躙し、まだ其の上女の生血を吸はむとする者を手だまに取つて相手にせむと決心した。若し左樣すれば其麼男と知つて此方も戀する氣は最初からなし、又向ふも千軍萬馬の强者、

單に其の場限り、どつちも孰方だと臍を定めて、務めて其麼者共を相手に男狂ひしてゐる相です」

「へ！え？」

と、奥様は珍らしき許りの好奇の眼を輝かして聽いてゐた。

「そして其の女は今でもゐるんでせうか」

「ゐますとも！之は極く最近の話です。」

「ぢや矢つ張り其麼行跡を續けてゐるんでせうか」

「えゝ、斯うして一生を面白く暮らすんだと女は名優に云つてゐた相ですから」

「へーえ變つてゐますねえー。然し其の女をして其麼自暴自棄にさせたのは矢つ張り男が惡いんですね。然し又不純な戀を盡した男ばかり狙つてゐる所に、良心の閃めきがありますね」

と、奥様は女だてらに女の身に同情した。己れは其の船頭よりも寧ろ何も知らぬ船頭の妻子の身の上が傷しかつた。

「まだ之に似た話があります、然し餘り此麼話を申上げることは好くないと思ひますから控へます」

「えゝ私は少つとも構ひません、たゞ〳〵物珍らしさに打たれてお聽きしてゐるんですから」

それでも己れは之れ以上に就いては語らなかつた。これは單に一つの座を面白くする挿話であつたのみだ。

その話が終つた頃女中は注文して置いた淡泊した料理を運んで來た。

「御給仕をしませうか」と云つたけど、「いゝから」と云つて己れは退けた。そして二人限りで色々面白きことのみを語らひながら箸を進めた。

「何んて珍らしいんでせう？」

と、眼に大きな鮎が附いてゐたので、季節が季節なのでMさんは驚異の眼を

みはりながら訊いた。

「之は夏捕つたのをズッと氷詰めにして、宛然生きた儘にして貯へて置くんだ相です、仲々その苦心が並大體ぢやないと云ふことです」

「左樣でせうねえ、左樣でせうねえ」

と、大きく頷き、且つ感心しながら、

「私の父は大變料理好みですから、今度此家へ案内して驚して遣りませう」

と、早速親孝行な所が出た。

食事が濟んでからも話は限りなく續いた。

○

「奥樣、又思ひ切つたことをお訊ねして失禮ですが？」

「？」

「一昨日電話をおかけした時、最初電話口へお出ましになつたのも、次に出たのも孰方も奥樣ぢやなかつたんですか」

「いゝえ、何うして？」

「でもよく聲が似てましたよ」

「左樣ですか、最初のは小間使ひです」

「私は奥樣が一應威嚴上一寸引つ込んだんぢやないかと思ひました。私なら屹度左樣したに違ひませんハッハ……」

「まさか、威嚴だなんて。私しは孰麼方から電話があつても、居るなら居ると判然答へさす樣にしてゐます、居なければ居ないです。あいまいな態度は執りません。但し之は辯解でも何んでもありません、辯解は卑怯ですから」

己れは其の言葉を聽いて、最初色んな憶則を逞うしたことに就いて自身を恥じた。だから明らさまに云つて、謝した。奥樣は、

「本當に貴方は惡いことは直ぐ惡かつたと白狀なさる美しい所を持つて被居います、湊さん酷似ですね、私し此麼方が大好きです」

と、到頭己れまで最後に賞められた。

「もう遲い樣ですから歸りませう」

と、奥樣が時計を見た頃は、生憎外は大雨であつた。

「もう少し晴れてからにしませう」

と、己れは云つた。

「左樣しませう」

二人は又暫らく物語つた。雨は少しく錆を收めた。

「そろ〳〵歸りませう、一寸お待ち下さい」

と云ひながら、己れは廊下へ出て女中を呼び、傘を貸してくれと云つた。おかみさんはお易い御用と奥の方へ飛んで行つた。

いつも己れは此の家へ遊びに來て、歸ると云ひ出すと、必ず女中は自働車を云ひませうかと訊いた。己れは少しでも此の連中から好い身分に思はれたいと思ふ虛榮心の情けなさ、なアに今日は歩いて歸ると輕やかに退けてゐた。まアお歩行で、それも御愛嬌でいゝかも知れませんと云つては女中は玄關で見送つた。或時は自働車、或時は車、樣々に勸められた。又實際この家は我々みたいな貧乏人の來る家ではなく、恐く自働車や車を常用する金滿家ばかりの出入する場所であつたから、女中が自働車だの車だのと云つて呉れるのは聊かも皮肉交りでなく、眞に親切と氣轉より外ならなかつた。

然し何日歸る時でも己れは徒足所謂お拾ひに定め込んで居るものだから、此の頃では何んとも云はなくなつた。或る時は偶にはサツと風を切つて自働車の中にフンゾツて歸らうと思はぬでなかつたが、後で財布を覗いてオヤ〳〵と後悔する時間の方が、自働車に乘つて得た快味より長いから何時も控へてゐ

た。己れは始終身分不相應と云ふことに就いては堅く心を引き緊めてゐる。

近頃はもう女中の方で大慨を察して其れを云はなくなつた、此麼數にもならぬ客ながら、他の客一倍一同は己れの爲めに盡して吳れる、樣々の友人が金こそなけねあの男はと誇大に吹聽してあるらしい。それとも一つは己れは總ての者に對して言葉使ひを叮嚀にして居る、女中だからと云つて決して下等な言葉を使はぬ、彼女等には我々に優る必ず長所を持つてゐるんだ、その長所に向つて己れは車夫にでも何んでも敬意を拂ふ。たとへば己れに一里の道を車ひけと云はれても其れが出來ない、それを彼等は輕々と遣つて退ける。つまり長所だ。若し職業に貴賤の無いものであつたら宜しく言葉使ひにも貴賤の無い筈だと己れは考へてゐる。だから例へば女中に他の客なら『オイ何々を持つて來いッ』と云ふのを己れは『何々さん、何々を持つて來て下さい。。。』と云ふ。彼女等とて人間である、感情の動物である。來いッと云はれて心よいか、下さいと云はれて心よいか。

この點に於て己れは却つて感謝と尊敬を受けてゐる。

話は飛んだ横道へ入つて濟まぬことをした。さて、傘を玄關に置いて貰つて、それぢや愈々歸らうと思ふて部室へ戻らうとすると、女中が、

「御婦人さまの足駄が低いから、高いのをお貸しゝませうか、道が大變汚なう御座いますから」

と、氣の利くこと夥だしい。

部室へ來て奥樣に訊いたら、私は高いのを履くと却つて歩けませんからとあつた、だから其の儘にして措いて貰う。

「ぢや歸りませう」

「それでは」

と、奥樣は淑かに立ち上がつた。スタイルのよさ!!

○

電車は仲々來なかつた、人が黒だかりに雨に濡れて待つてゐた。我々も柳の下に待つてた。好奇が時々傘の下から覗く樣にして見た、知らん顏してゐて遣つた。

軈て來た、來る電車も來る電車も滿員であつた。私は二人並んで坐つてモ少し話したかつたので、「空いたのに乘りませう」と云つた、勿論それには異存がなかつた、矢つ張り同感であつたに違ひない。その裡空いたのが來た、二人は其れに乘つた。

乘つてから、

「本當に今日程愉快な日は近頃にない、私は心から奧樣に感謝します」と云つた。

「いゝえ私こそ。頭腦が秋空の樣に澄み切つた氣持ちです、樂しい限りでした、心からの喜びでした」

と、奧樣も滿足仕切つて云つた。互は聊かの蟠まりなく何事も思ふ存分云ひ得たと云ふことが何よりの嬉しさであつたのだ。人は其の心の奧底を隱し立てなく云ひ得た程爽快なものは無からうと思ふ、二人は今日此の日それが思ふ存分振舞れたのだ。

日比谷で別れて了ふんであつたけど、何んとなしに其れが惜しくもあり、且つ奧樣の心に一人ぼつちになつた淋しさを持たせまいと思ふ心から、

「お見送り旁々」と云つて、奧樣の方の電車へ共に乘つた。奧樣は心から其れを感謝した。

「奧樣、貴婦に私は今後お逢ひたいと思ひしますが」

「えゝ、私も何麼に願はしいことかも知れません」

その答へは私をして歡喜に波打たせた。

「暇さへあつたら」

「えゝ、どうぞ！」

と、私は強く云つて、

「私はもう少し早く奥樣の樣な總てに寛容な、そして理解のある御婦人を知ることを得たら、昨年から何物とも知れぬ惱ましい荒んた心に襲はれてゐなかつたらう、全で嵐の樣な私の心はツイ先日まで續いてゐました。今奥樣に斯うしてお逢ひしてゐると全で春の光りを浴びてゐる樣な氣がします。」

「恐れ入ります。ほうたうに光榮です。私は貴方の、純な正直な、そして感傷的な所から、色々學び得たいものがあります、どうぞお見捨てなく御交際を」

その聲は低かつたけど強かつた。二人は互を信じ、互の存在を祝福した。

悲しくも別れの頁が近づいた。見よ電車が水道橋まで來たでは無いか。私は

何うしても下りて了はなくちやならない時が來た。

私は立つた、私は挨拶した。その聲は態とばかり凛々しかつたけど、語尾は淋しい餘韻に終つた。

樣々の物思ひよ、希望よ、歡喜よ、それに入り亂れて私は唯運ばれた。

美しき頁よ、遂に今夜を閉づるのか。

○

翌晩禮の手紙がMさんから來た。

「かねてからお噂さ許りで最非一度お目にかゝりたいと存じて居りました處、湊樣御紹介でお近づきを頂き、何より喜ばしく思ひました。殊に初めての御面會に散々おん欺待を頂きましてお禮の申上げ樣も御座いません、たゞ思召しの程難有くお禮申上げます。尚又あの雨の中をお廻り遊ばしてのお見送りは重ね

重ね御挨拶の申上げ様も御座いません、本當に恐入りました。

湊さんと性格が違うと許り承つて居りましたけれど、お目にかゝつて見ましたら矢つ張り御本を拜見して私がおよそ想像して居りました通り湊さんの性格の美しい所とよく似た然うして又私達の氣分ともピッタリ出會ふ處のある事を知りまして此の上なき嬉しく思ふて歸りました。

家に歸つて考へました、犬も歩けば棒にあたるとか私の樣な人間が此の不景氣に御馳走に成つて新智識を注入して頂く世界のあるのを發見しまして、大に心丈夫に思ふて居ります、近々又お目にかゝりたく樂しんで居ります。」

私から次の樣な返事を出した。

「手紙を差上げ樣と思ひつゝッィ遲れてゐましたところ、却つて先鞭を付けられ、恐縮に魂を縮めてゐます。

私は本當に何等の粉飾なく心ゆく許り打ち解け合ひたい御婦人の方を一人欲

しいと思ふてゐました。それは容貌に於て又才能に於て愛情に於て、總てを備つてゐる人であらねばならなかつた。所が測らずも機會が私に此の理想を與へて呉れた。私は此の美しき糧に依つて喜ばしき今後を迎へるであらう。

けに美しき心の糧!!

私はひとりでに微笑みを洩らしてゐます、本當に心からのほゝえみ、あゝ之が欲しかつたのだ、喜びの訪づれよ、願はくは永却なれ。噂に優るお筆の運びの旨さ!そして本當に女らしい所のある身も心も美しき婦人、私は高らかに聲をあげて讃美せねばならぬ。

弟よ、おん身何故に此の人を示す餘りに遲かりし。

私は美しき訪づれが、必ずや又近い裡に私を微笑ますことを、戀人を待つが如くに待ちこがるゝであらう。」

瑞枝さん

「前略、

名にし負ふ關東一の紅葉と謳はれたる碓永の峠は今紅る眞盛にて候、御來遊如何に候也」と云ふハガキを輕井澤鶴屋旅館主より受取つた己れの血汐は流石に湧き立つた。おのれ何を置いても行かずんばある可からず。

恰度その時或る女學校から是非講演をと賴まれてゐたので、一面美しい若人達の顏も見たかつたけど、美人と自然の大景とを比較するの時、吾人は何うしても宇宙の奇しき偉大さに嘆美と憧憬の叫びを禁ずるを得ない、之れが己れの尊さである。美人何者ぞ、人間何者ぞ、大宇宙が織りなす綾の面白さ、大さ、大パノラマは之れ吾人を樂します眞に美はしきものであらねばならぬ。

山靈と自然の偉大さに觸れたことの無き人達は或は玆に共鳴を感ずる譯にはゆかぬであらう、我れ幼時より山に憧憬れ、山を踏破し、然して具さに神秘の何者かに觸るゝの時、小なる總てを忘れて、たゞ恍惚として神宿るかを想ふ」

自然は正に之れ吾人の生命であらねばならね。

立て、何を置いても吾人は行かねばならぬ。

○

上野驛を夜行に乘つた。

汽車が赤羽を過ぎる時、隣に座つてゐた老人が煙草の火を借せと云ふ、快よく之に應ずるを機會に、老人は半分お世辭めいた口調で、

「どちらへ？」

と、訊く。

「輕井澤へ」

「輕井澤へ？ホウ紅葉ですか」

「えゝ」

「いゝでせうナ」
「いゝ相ですよ」
「此の汽車は何時頃に着きます？」
「十二時過ぎです」
「大變ですね、眞夜中ですから、寒う御座いますよ、況んや輕井澤ですから」
「左樣だらうと思ふてゐます」
など〻話合つてゐる時、恰度前に席を占めてた二人の女がニッと互に見合はして笑つた。己れはツイ其の方へ釣り込まれて、話の途切れを理用して二人を見た。

一人は何う見ても女中らしい、そして一人は確かに令孃である。一見急ち大家の育ちであると云ふことが頷づかれた。その美しさよりも第一その氣品は何事も語つてゐた、眼と鼻と口元には何處となく上流社會の閃めきが走つてゐた。女中は此の君を只管守つてゐると云ふ風情が見えた。

恰度大宮を汽車が出ようとする時、
「あの甚だ濟みませんが」
と、令孃は腰を浮べて私に物云ひかけた、私の眼は思はずその面上に灑いだ。
「濟みませんが、後の窓を閉めて頂けないでせうか、少し寒いものですから」
「あゝ、左樣ですか、私はヒイ〳〵ステーションへ駈け付けた故か今だに暑いものですからツイ他人のことも忘れて了つて。イヤ却つて濟みませんでした」
と云ひながら、快よく後向きになつて硝子窓を閉づると、
「どうもお手數をかけまして」
と、お禮だ、
「いゝえ」
と、少しく腑目がちに答へて、斯う云ふことを賴むに際し、寧ろ女中を使つ

て云はすことなしに自分自らが進んで、この事を云ひ出した淡泊な氣持ちが私には嬉しかつた。屹度先分でも少くも紳士に對する道として、生じつか女中を使つて相手に幾分でも「生意氣な」と云ふ反感を抱かすよりも、寧ろ自分から進んで斯う云つた方が何慶におだやかに且つ柔かい感じを與へるだらうと云ふ心配りがあつたらしい、私はこのこと一つで彼女の冷悧なるを悟らざるを得えなかつた。

「あの輕井澤へゐらつしやるんですか」

「えゝ」

「お宿は？」

「鶴屋です」

「まア鶴屋！」

と、二人は一寸見合はしたかと思ふと、又令孃が、

「私共も輕井澤へ行くんです、そして鶴屋のツイ近くにゐるんです」

オヤツと私は少しく奇遇らしく思ふた。

「左樣ですか」

と、知己を得たり顔すると、

「矢つ張り紅葉見に參るんですよ、」

「ぢや鶴屋の近所に別莊があるんですか」

「えゝ、ツイ近くに。……それに鶴屋には今私の繪の先生が宿つてゐるもンですから」

「ホーどなたです？」

「田口（假名）先生で」

「田口と云ふと帝展の審査員の方ですね？」

「えゝ」

「左様ですか、どうでせう紅葉は？」
「今屹度盛りでせうと思ふんですが」
と云ひつゝ、僕の一方の座席が空いてゐたものだから「一すね」と女中に殘しながら、横へ坐り、
「一度かゐらした事がおありなんですか」
「えゝ此の夏參りました」
「何う思ひなりました？」
「いゝ所ですね、本當に好きになりました」
「別莊の方どなたか御存じですか」
「えゝ江木さんも、それから藤島さんも」
「まア藤島さんも！私は藤島さんのお孃さまと仲いゝ友達なんですよ」
「オヤ、オヤ左樣ですか」

と、益々話がはづんで、
「ぢや失禮ですが貴女は？」
「私は尾山（假名）と申します」
尾山さんの令孃？噂に聽いてゐたが此の人か成る程氣品のあるのも無理は無いとニンガリ頷いて、先方の名を聽いた丈けで、此方が默つてゐては却つて失禮だと思ふて、私は私のポケットから名刺を出して渡した。令孃はヂッと見て、
「西川他見男つて、あの奥野他見男先生ですか」
「先生ぢやありません、他見男さんです」
「まアお春」
と云つて、女中の注意を惹き、
「この方がそら他見男さんよ」
「まア——」

と、恥かしいやら驚きやら。令孃は繁々と横顔を見詰めて、

「まァ幾重にも御無禮を」

と、何が無禮だか知らぬが、詫びながら、

「お名のことはよく御本で。……それに鶴屋に此の夏宿つてゐらした方からも承はつてゐました。貴方がお歸りになつてから急に淋しくなつたと皆さんが潘してゐらつしやいましたよ、私は恰度お歸りになつた二日後から毎晩あすこへ遊びに行きました、皆さんがお集まりになると屹度他見男さんの話が出たんですよ、あゝ云ふ賑かな愉快な方がありませんつて、ねえ春や」

「えゝ」

己れは此の言葉を聽くと、夏の樂しい夜のあの騷ぎを想ひ出さずには居られなかつた。

「先方には誰方か行つてゐらつしやるんですか」

「いゝえ誰も」

「お父さんもお母さんも」

「えゝ誰も！」

「ぢや淋しいでせう？」

「早速お遊びに明日から參りますわ、どうぞ宜しく」

「いやァ、こりや賑かでいゝですぬ、贊成ですなァ！」

「何う云ふ御豫定ですか」

「豫定も何もないんです、鶴屋の主人から血をそゝる樣なハガキで勸誘が來たものですからォーライと許り直ぐ飛んで來たんです」

「いつお歸りです？」

「それも解りません、貴女方は？」

「私共も左樣なんです」

「ぢや行動を共にしませうか」

「そして頂けば何麼に氣丈夫でせう、ねえ春や」

「えゝ男の方が一人ゐて下さるとねえ」

と、春は應じた。

高崎へ汽車が着くと己れは牛乳とサンドイッチを三つ宛買つた、牛乳は一本丈けしか無かつた。サンドイッチを一つ宛別けた後、牛乳丈けは令孃に與へた。

すると裂しく之を辭退して、

「私し要りません」

と、首を振つた。

「お嫌ひですか」

「いゝえ嫌ぢやありませんけど。……だつて一本しか無いんでせう?」

「左樣です」

「ぢや何卒貴方が召上つて下さい」

「私は構ひませんから何卒」

「でも、いゝえ、本當に何卒」

「いゝや少つとも御遠慮なく。弱者に味方するんですから」

「弱者だつて……」

と、品のいゝ笑みを洩らしながら、

「何んだかお氣の毒ですわ」

「構ひませんから」

到頭令孃は受けた。

「春コッブが無い?」

「お孃樣、持つて參りませんでした!?」

「左樣?」

と悲觀して何うしやうかと云つた鹽梅。

「その儘口づけにしたらいゝでせう？」

と、私は半分面白相に、半分彌次的に云つた。

「そんな事」

と、令孃は又オホッと笑つた。

「汽車に乘つたら、汽車に乘つた覺悟しなくちや、幾程大家のお孃樣でも此處中で我儘は通りません、ハッハッ」

「でも」

と、困つた風情があると、

「お孃樣、仕方がありませんよ、よく其處の口穴をハンカチでお拭き遊ばして召上つたら」

と、春さん比較的進歩してゐる。

「だつて他人が見てゐるぢやないの？」

と、令孃一歩進んだ返事をした。

「他人が見てゐるて。ぢや斯うなさいまし、おハンケチで其の饅を蓋ひ被せて知らん顔して其れとなしにお飲みになつたら」

「さう？」

と、云ひながら、その事を試みむとして、一應ハンケチで蓋ひ、口に當てむとして急に氣極り惡げに、

「可笑しいわ」

と、躊躇する。

「可笑しかないわ、何だか解らないんですよ」

と、女中は懸命だ、屹度少しでも滋養分を召上がつて貰はなくちや私が困ると思ふたんだらう。

「なァに孰麼人だつて、鄉に入れば鄉に從へだから」

と、己れは益々薦めた。遂に令孃は思ひ切つて、それを口に當てた。白い咽喉笛が一呑みする毎に金魚の腸の樣に小さく動いた。

漸つと半分程呑んで、

「もういゝわ」

と、何うしても四邊の人に對して氣極りが惡かつたと見えて、罎を下に置いた。己れはサンドウィッチを嚙りながら、

「ヨーまだ殘つてゐる」

と、自分も咽喉が乾いたものだから、心あり氣に見詰めながら、

「もうお喰りにならないんですか」

「えゝ」

「ぢや其の殘りは私が貰ひますよ」

「だつて私がもう口を附けたんですから」

「そんな事は構ひません」

「でも失禮ですから」

「いゝや」

と云ひながら罎を取らうとすると、令孃は慌てゝ持つてゐたハンカチで口元を拭かうとした。手早く己れは其れを引いて、

「この儘の方が却つて」

と、云ひながら、無造作に其れを口に當てた、令孃の頰には其の時かすかに赤らみが走つてゐた。

「汚かつたでせう?」

「いゝえ、美しかつたです」

二人は相見て、相感じた。親し味がお互の胸から胸へと此の時傳はつた。

「春や、その鞄を下さいな」

と、令孃は手下げを要求した。「ハイ」と畏まりながら女中は渡した。令孃は其の中から紙包みを取出して披げた。美しい銀紙の堅まりが薄暗の中に仄見えた。チョコレートだナと思ふと、令孃は其れを一つつまむで、

「お喰りなさいナ」

と、一つ私にすゝめた、私は喜んで受けた。

「春や、一つ」

と、女中にも渡した。

三人は面白相に銀紙をめくつた、中から果してチョコレートが現はれて來た。ガブリと嚙むで、私は思はず「此奴あ旨い」と叫むだ、忽ち又一つ渡された。それも終つた。

三度目に令孃は密つと半分くれた、默つて受取ると彼女は自分の手にしてゐた半分を口に入れたかと思ふとニッと笑つた、心あり氣な笑みである、私もニッと笑むでそれを口へ入れた、心あり氣が應答である。女中には此の玄妙な詩味が幸ひ氣附かれなかつた。

味たつぷりな令孃の戯むれである。私は美しき幻影に包まれてゐる樣な、そして暢けき春の野に逍遙てゐる樣な暖かい氣持ちを感ぜずには居られなかつた。

横川を過ぎると、高原の氣宇は流石に迫まつて來て、今までの空氣が急に冷めたくなつて來た。

「風邪でも引いたら」

と云ひながら、私は私の脱いでゐたレンコートを彼女の膝に被せる樣にした。

「まア此麼にして頂いては」

と、令孃は本當に私の親切に感銘措かなかつた、そして何うしても自分のみが占むることが心苦しかつたと見えて、

「では半分宛、ね」

と云ひながら無理に私の膝へも其れを被つかぶせた。

「斯うしてゐたら却つて暖かいでせう？」

と、令孃は何氣なき風を裝ふて云つた。

「ぬくみとぬくみが自然にお互を暖めますから一人で占領してゐるよりか」

と、私は「お互を」と云ふ言葉に力を入れて云つた、二人はお互にそれ〴〵無言の笑みを洩らして何かを悟つてゐた。女中の春は其の頃は晝の疲れからか何時の間にやら假寢の姿で少つとも此麼事には氣が附かなかつた、又それと知つたなればこそ互は互が其れ丈け進んだことは事實であつた。

「チョコレート上げませうか」

私は頷いた、すると女は又半分にして半分を渡した。二人は眼と眼で物云ひながら一緒に喰べた。

「オヤ、まア貴方の爪の汚ないこと！」

と、この時令孃は突然見上げてゐた眼で私の手を見詰めて斯う云つた。

己れはヒヤリとした。そして、

「手なんか迄男は構つて居られない」

と、仕方なしに苦しい辯解して、

「ぢや貴女の手は？」

「私のは」

と、白い指を私の膝の上へ載せて示しながら、

「綺麗でせう？」

私はヂツと觸りもせず眼を落した、全で珊瑚の玉を薄絹で包むであるかの樣に光りを帶びて血色が鮮かであつた。

私は自分の爪が餘りに汚なさに恥入つて了つた、そして今迄あらゆる女性か

ら爪のことに就いては何等の注意も觀察も與へられなかつたのに、獨りこの女から斯う云はれたことを意外に感じた。そして私は私の爪の爲めに自己の生活を洞察されるんぢやないかと其れが苦しかつた。私は唯此のことのみで谷間へ蹴落された樣な感じが淞々と胸打つた。

爪の修飾とはあゝ更らでだに氣附かなかつた、流石は大家の令孃である、大家育ちだけあつて一般の女性の氣の附かぬ所へ氣を附けるものだと私は寧ろ半分怖れを抱いた、そして此の爲めに少しでも今の時間まで私に抱いでゐた好感を消す樣なことがあつたら、私はどんなに其れが悲しいことであらう。

然し幸ひ令孃は左迄に深くは感じなかつたと見えて、

「お磨きなさいナ」

と、寧ろ好意的に私に勸めた。そして鞄の中から今まで見たこともない爪掃除器を取り出して、「斯う云ふ風に」と云ひながら、自分でして見せてから渡した。

私は「左樣？」と云ひながら、今見た許りの動作を試みた。令孃は見てゐた。

「貴方は拙手だわ、駄目よ、私が磨いて上げませうね」

と、私から其れを勝手に受取り、

「お手をお貸しなさいな」

と云つた。私は野暮な指が又令孃に檢分されるのが厭さにモジ〳〵してゐた。

「ね！斯う云ふ風にして」

と云ひながら、令孃は私の手を遂に引上げた、そして自分の膝の上へ其れを載せた、柔らかさ！あゝ柔らかさ!!

白い手は私の見苦しい指をいぢり廻はした、果ては確つかり握つた、そして磨いた、玩戯に磨いてゐるのか本氣で磨いてゐるのか其れが私には解らなかつた。

「ねぇ綺麗になつたでせう、ねぇ」

と云ひながら、猶も白い手が躍つた。

「光つて來たでせう、ね」

と、黑い指と白い指が、組むでは絆れ、絆れては組むだ、時々二人は見合はした。

その時ズーッと偶にゐた若者がオホンと咳拂ひした、吃驚して其の方を見詰めると先刻まで確かに眠つてゐた筈なのが、何時の間にか兩眼を開いて、妬ましい樣な顏をして此方を見てゐた、二人が期せずして其方を見た時變な笑を此方へ向けてゐた。

「フン」

と私は小さく反抗した。

「妬いたんでせう」

と、女は云つた、二人は唯ニコ〳〵とした。手は互の膝へそれ〴〵戻つたけど話は盡きなかつた。

輕井澤へ着いた。

下りたのは此の三人の外別に二組あつた。プラットホームを出て行くと、三臺の車が並んでゐた、私は上野を發つ時電報で知らせて置き、同時に此の前の失敗もあつてはと車を寄越して置く樣にと打つて置いたから、その裡の一臺は勿論私の爲めに來てゐるものと云ふ確信があつた。

「オーお孃樣」

と、見知りと見えて、老車夫が令孃の傍へ擦り寄つて來た。之も電報で知らせてあつたものと見える。

「御苦勞」

と云ひながら、

「鶴屋から來てゐる車は?」

「へィ、」

と、若い十八九の車夫が返事した。

「この方ですよ」

と、私を振返つた。そして私には「どうぞお先きにお乘り遊ばせ」と勸めた。

三人の車は間もなく深夜の輕井澤の町を走つた、寒さの爲め身體がひとりでにブル〳〵と震へ出してきた、私は堅く拱ぬいで首を深く縮めながらも久々での町や野がなつかしかつた。

天地は唯白い霧で包まれてゐた、行方も過ぎし方も左も右も山も野も總ては白かつた。

「ツイ先達まで月見草が咲いてました」と問ひにまかせて車夫は答へた。美しかりし月見草よ、もう其れでは枯れて了つたのか。

「では屹度明朝お訪ねしますわ」

と、鶴屋の前で令嬢の車と別れて私の梶棒は下ろされた。

「オ、奥野さん」「奥野さん」と呼ぶて出迎へてくれた顔は皆喜びに滿たされてゐた。

私は感激に打たれて飛上がつた。

通された二階には見よ眞赤な火！湯のたぎり!!夜具のあたたさ！。

旅人のこゝろよさ。

○

フと眼が醒めた時には雨戸から強い光りが障子に洩れてゐた。夜が疾くに明けたナと思ふと同時に、カラリとして秋天が想像されて、思はず微笑を洩らしながらも容易に床を放れることが出來なかつた、ヂッと眼を開けながらあたゝかき臥床に執着を持つてゐた。

すると軈て階段を登る人の氣配がした、それが漸次私の部室へ足音が近づいて來た。女中が雨戸を明けに來たのか知らと思ふてると、障子の外から、ポン〳〵打つて、

「まだお眠みなの？他見男さんお眠み？」

と云ふ其の聲は紛れもなき瑞枝（假名、令孃）さんであつた。

「ウォー」

「そんな虎みたいな聲を出さないでお起きなさいな、もう八時ぢやないの」

「ウーム」

「明けてもいゝ？」

私は寢顏を見られるのが厭だつたから、

「不可ない」

と云つた。

「ぢや早くお起き遊ばせ、先刻から隨分階下に待つてゐたのよ、」

「も少し」

「そんなに仰しやると何うしても明けます、さ明けますよ」

「オッと、待つてくれ、ぢや起きる〳〵」

と、到頭私は半身を起した。漸つとの事で立上がるが早いか、

「君そつちの部室で待つてゐたまへ、僕直ぐ來るから」

と云ふが早いかスーッと寢室から拔けて其の儘階下へ急いで下りて行つた、顏洗ふ水の冷めたかつたこと！冬の水の樣だ。

瑞枝さんはお茶を入れて待つてゐた。

「ヨー君は早起きだなァ――、」

と感心して見せると、

「早起きぢやないことよ、貴方が遲いのよ」

「もう總かり御化粧が濟んだと見えて綺麗だこと！
「まア男の癖に！知らないわ」
と、云ひつゝ茶を入れて、
「召上れな」
「ヨー難有いナ、屹度この茶は旨いだろナ」
「何故？」
「だつて入れて呉れた人が違ふからねえ」
「知らないことよ」
と、につこり。
「貴女は？」
「私し飲まないの」
「何うして？」

「嫌ひなの」
「何うして？顔に皺よると思ふて？」
「いゝえ其麼事ないけど、唯嫌ひなの」
「妙だナ、珍らしいナ」
「でも珈琲なら好きよ、」
「オー左樣か、それなら」
と、呼鈴を押した、女中が來た。
「お目醒めで御座いますか」
「到頭叩き起されちやつた、危く此の御令孃が侵入しやうとしたものだから吃驚して飛び起きた所だ」
「侵入だなどゝ他人聽きの惡いことを仰しやるものぢやありませんわ。」
と、一寸ブーンとして見せる。

「怒ると顔の形が悪くなりますよ」

と、節面白く慰撫めながら、

「珈琲か出來ますか」

「ハイ、拙いんで宜しければ」

「ぢや何卒、このお孃樣が呑みたいと仰しやるから」

「いゝえ御自分がお飲みになりたいんですよ、それを私に托つけて、ひどいわ」

と、一寸ゆすぶつて見せる、擧止飽くまでも品位ゆたかなり。

女中は畏まつて去つた。

「ねえ他見男さん」

と、總つかり馴れた口調だ、私はそれが嬉しかつた。

「今日ね碓氷へ登つて見ませうか、こんな好い天氣ですもの！」

「贊成だ、だが姫御前歩けますか」

「そりや。學校時代には隨分鳴らしたものよ」

「然し名にし負ふ碓氷の峠は何うかなァー」

「碓氷峠と云ふと仰山ですけど、輕井澤から登つたら、そりや平坦なんですつて！」

「だつて君あがつたかい？」

「いゝえ」

「ぢや當にならんぢやないか」

「だつて皆さん左樣仰しやつてよ」

「若し途中でヘコ垂れたら」

「貴方におん負するわ」

「光榮だねえ、大に光榮だねえ、成る可くなら其の方がいゝ」

「所が仲々以つて參りませんから其のお積りで、却つて貴方こそ」

「何を云つてゐるんだい」
「ぢや行きませうね」
「よしッ、女中さんは？」
「あれは留守番よ」
「だつて大事なお孃樣を手放しゝては」
「いつまで私だつて子供ぢやあるまいし、それに貴方が附いてゐらつしやるんですもの！」
「信用があるんだなア僕は」
「左樣だわ、だから確つかり保護して頂戴な」
「畏まつた。して朝飯は？」
「疾くに濟んだわ、貴方は？アラ今起きた許しだつたわねえ、急がしませうか」
と、呼鈴を押した。と入れ違ひに女中は珈琲と、御飯を運んで來た。

女中は、仲々氣が利いてゐる「お孃樣濟みませんがお給仕をして上げて下さいな」
と、云ひつゝ身を引いて行つて了つた。あとは二人限り他人から見たら新婚の睦ましさを思ふであらう。
私が御飯を喰べてゐる間に瑞枝さんは珈琲の白い茶椀を眞赤な唇に當てゝ、音なう吸ふてゐた。
食事が終つて一寸小用に立ち上つて下りて行つた時、ピタリと主人に逢つた。
「昨夜は」
と、挨拶しながら、
「いゝ天氣ですな」
と云ふと、
「何うです、今日はお出かけになりますか、碓氷の方へ」

「えゝ今から行きたいと思ふてゐるんですよ、あの令孃も一緒にと云ふんです令孃は歩くと云ふんですけど、どうかと思ひまして車でも呼ばうかと考へてゐるんです」

「いゝえ大丈夫ですよ、あのお孃樣は其れは健脚ですよ。道御存知ですか」

「いゝえ」

「それでは私が御案内致しませうか」

と、いつもながらの親切だ。

「いゝや、貴方には恐入ります、誰か外に」

「いゝえ、私共も偶には此麽いゝ天氣の日に外へ出かけて來ると、氣持ちがカラリとするものですから。それに貴方と一緒なら」

と、千萬忝けない一言だ。

「若し左樣して頂けば其麽結構なことがありませんが」

「ぢや私がお供しませう」

わアー難有いと私は二階へ飛び上がつて行つた、そして令嬢に此の由を云つた。令嬢もニンがり微笑して喜んだ。斯う云ふことは連れさへ多ければ面白いものだ。

「ねえ貴方、それはよく〳〵の好意よ」

と、瑞枝さんが云つた。

「假りにも宿屋の主人が自ら案内に立たうと云ふのは私し此處へ來て始めてよ」

「大に感謝しなくちやならぬ」

「全くよ」

と云つてる所へ、今度は主人が上がつて來た。

「奥野さん、今一人行きたいと云ふ人があるんですが差支へないでせうか」

「どんな人？」

「中學生の方です」

「そりや猶結構です」

「そうですか、若し左樣さして頂けたら、本當に御本人も喜ぶでせう、それでは早速申上げませう」

と、急いで階下へ又下りて行つた。

最早出かけると云ふので、令孃は部室にあつた鏡を眞中に取出して顏を寫した。

「自分ながら美しいと思ふでせう？」

「皮肉だわ、そんなこと云つて」

と云ひながら、お化粧を遣り直しかゝる。

「そんなに綺麗なのに、まだ物足りないんですか、」

「そんな事は無いんですけど、女の矯みですもの！」

「いくら女の矯みだつて、山登りにお化粧の必要は無いぢやありませんか」

「そりや左樣ですけど、少しでもいゝ具合にお化粧が出來てゐると、他人が見て吳れる吳れないに係はらず自分で氣持ちがいゝんですよ、」

「ホウ左樣かなア」

「貴方だつて左樣でせう？」

「何が？」

「何がつて他人が見てくれても吳れなくても頸の髭が綺麗に剃れてゐると、ツルくとしてゐて好い氣持ちでせう？」

「そりや左樣だ」

「それと同じ心裡狀態よ」

私は一本參つて返す言葉が無かつた。

用意して立上がつて下りて行くと、主人と中學生が既に待つてゐた。中學生

は默つて叮嚀にお辭儀した、眼の凉しい鼻の高い坊ちやんであつた。

外へ出て見上ぐると、あゝ秋天は高しと呟かざるを得ない上天氣であつた。

いざ皆さん、參りませう。

○

道は鶴屋旅館から直ぐ登りになつてゐた。

第一に眼についたのは隣の紅葉であつた、全で若い乙女の血汐の樣な紅ゐを呈してゐて、その色滴る許りであつた。

瑞枝さんは小言で私に云つた。

「二人だけだと少し淋し過ぎるし、多いと賑か過ぎるし、ねえ」

私は微笑した。

二人は時々距たることがあつたが、いつの間にか手と手が觸れることが多かつた。

「瑞枝さん疲れませんか」

「オホッ」

彼女は疲れたとも疲れないとも云はなかつた。登るに從ひ眼界は開けて來た、途中の茶屋で一息して又進む。殆んど登り詰めたと覺しき所に熊野神社と云ふ見るからに古いお宮があつた。

石段を上がつて行く時主人は云つた、

「このお宮の半分が長野縣で、半分が群馬縣です、だから神主は兩縣から來てゐるんですよ」

と說明しながら、突然サッと跨を擴げて、

「この左の足が群馬縣、右が長野縣、中央部が境界線、ハッハヽヽ」

と、笑つた。

瑞枝さんは門内の白衣の爺さんから神符を買つた、そして一枚私にも呉れた神符の外に紙が一枚ついてゐた、それを擴げて見ると無數の烏を畫いてあつた。

「この中に逆さの烏がゐる筈です」

と、主人は畫を覗き込みながら、

「ゐました、ゐました。この烏を切り取つて呑むと、どんな病氣でも癒ると云ふんですよ」

「癒りますか、本當に」

「さアー、左樣云はれてゐるんです」

と、主人も一寸困つた。信州の山奥らしい迷信だ。

田舍の娘らしいのが四五人、ヂッと立止つて一行を見詰めてゐた、殊に瑞枝さんと私に眼を止めて密々と物語つた。又社殿の中に村の衆らしいのが四五人ゐたが、それ等は思はぬ此の美人の參拜に、最初は驚異の眼を交はしてゐたが、

だん〳〵聲高く冷評かす樣な口調を交ぜて此方を見た。己れは「汝等何者ぞ」と許り、威嚴ある眼をヂーッと据えて見返へた所、一同は急に默り込むで了つた。

石段を下りた所に茶屋があつた、柿があつたらと鵜の目鷹の目に睨むだが、見當らなかつた、繪葉書を求めたが、それすら無かつた、眞に休む丈けの茶屋であつた。

頂上は其處から直ぐであつた。「ヨーどうです、此の景色は」

と、主人は手柄顔に三人を傾みた。

オ、四方みな豁然！

見渡せば遙かに淺間の濱煙を距て〻日本アルプスの名峯槍ケ嶽は天空を突いて、雄姿見るからに豪快なり。續いて眸を廻らせば遠く榛名赤城の連山を始めとし、近くは妙義の奇峰怪石手に取るが如く見え、川と云はず野と云はず町と

云はず悉く收まり、加ふるに秋天譬へむ方なきことゝて、一同の快極りなし。殊に全眸悉く錦を織りなせるが如き美しさとて、佇立思はず時の移るを忘れしめた。

此處で又一人連れが出來た、今朝矢つ張り鶴屋から出た某大學の學生であつた。

愈々下る、紅葉や、黄ばむだ草に交つて眞白いすゝきが一面に咲き亂れてゐた。そこを輕く歌ひながら男女の若人は通るのである、詩の國に遊んでゐる樣な氣持ちが屹度お互の胸に宿つたに違ひない。

下りは登りより却つて苦しかつた、峻坂であつたからだ。喘ぎ〳〵冷やかな空氣ながらも矢張り汗を流して登つて來る人達を見る毎に、輕井澤から來ればいゝのにと同情せずには居られなかつた、それ等の人は熊の平と云ふ峠下のステーションで下りた人達であつたらしく思はれた、何事も詳しく知らず、峠に

近くありさへすればと思ふて來たのが飛んだ苦しみであつたと、後で必ず悟るに違ひない、急がば廻れと云ふ言葉は此處で强く呼び起された。

汽車の時間に遲れてはと一同可成スピードを速める、その爲めか到頭負けツ嫌ひの瑞枝さんは足が痛いと云ひ出した。

「さア參つたか」

と云ふと、

「參りやしないんですけど、唯足が痛いんですもの！」

と、半分泣き聲ながらも剛張を張る。

それではと兎ある木蔭に休む、その時瑞枝さんは自分の名刺を取出して何やら書き出した、一枚書いて直ぐ又一枚に書く。試みに最初のを見せて貰ふ。美しい細い筆蹟で、

「美しい秋空の日、仲よいお友達になつて私共は此の碓氷へ參りましたことを

お互によく記憶いたしませう、いつか私共は又廻り逢ふ日があるでせうね、」

私はハヽアン之は屹度二人の學生だちに與へるんだナと微笑した、小さいそして微かな妬みが一寸心の奥から芽出したが、直ぐ消えた。

一同は立上がつた。

到頭下り切つて了つた、その時は靴を履いてゐた者達の方が足の痛みが非道かつた。

皆は喝し切つてゐたので、ステーションへ入るや否や、そこにあつた清水に爭ひ近づいた、恰度バケツがあつたので、バケツに汲み、先づ私から口づけた。

「オヤ茶椀が無いの？」

と、瑞枝さん潘した。

「茶椀なんか兎ても。こゝへ今私がした樣に口を當てたら好いぢやないか。少つとも白粉が脱げやしないよ」

「だつて」

と、尻込みするので、

「こんな所へ來て贅澤を云ふなんて間違つてゐる」

「贅澤ぢやないけど」

と、モジ〳〵するので、主人は、

「ぢや私し一寸先方の茶屋へ行つて借りて來ませうか」

と、駈け出さうとすると、その時少し遲れて來た年かさの學生が、

「あります〳〵、コツプが」と云ひつゝ、鞄の中からアルミ製の少さいのを取出した。

「まア嬉しいわ」

と、女は喜びに手を叩く樣にして受取つた、そして急いでバケツの中から玉露の如き清水を汲んで、眞赤な小さい唇に當てるが早いかスーツと飲むだ。

「まア甘味しいこと！」

と、又お代りした。續いて交る〳〵皆は咽喉を充分濕した。

汽車の來る迄に未だ十五分あつた。構内で待つてゐるようかと云ふ話も出たが、多くの他人の視線を受けて坐つてゐるのも、感心したことぢや無いと云ふので、幸ひ此の熊の平では何んとか團子が名物だと主人が口切つたのを幸ひ、お互に甘いものを欲してゐた時だつたから、それッと許りドヤ〳〵と茶店へ目がけて行く。

茶店には矢張り四五人の田舍人らしいのが休むでゐた。其等は瑞枝さんを見ると、均しく驚異の眼をさらして見詰めた、中には團子を口に頬張つた儘口も動かさない者もゐた。

「さア、さア、お疲れさまで御座いましたろ」

と、云ひながら、腰が曲りかけのお爺さんがお茶を入れて出て來た。緣に腰

を下ろした儘でゐると、是非一寸でもいゝから入れと云ふ、それではと主人と私と瑞枝さんの三人丈け入つた、學生の二人は編上靴だつたので、脱ぐのが臆劫だつたか、そのまゝで腰を下ろした。何んとか團子は皮包みで出された、披いて見ると色が眞黑だつた、然し口に入れると、空腹だつた故か馬鹿に旨かつた、十の餅を皆は一擧に平げた、瑞枝さんは四ッ丈け喰べて、「私し此麼に頂いたのは始めてよ」と云ひながらお腹を擦る樣にした、上品なお育ちが此處でも仄見えた。

汽車に乘つたら、多くの學生が載つてゐた、入つて行くと、「ヨー美人」「ヨー」「ヨー」と、一切に聲を上げた、餘程時ならぬ此の花に嬉しかつたものと見える。中には密つそり寫眞機を向けた者がゐたが、突然失策つた！と大きな聲を出したので、外の連中が其の男の傍へ「何うした、何うした」と近寄ると、慌てたので、二重撮りをして了つたから滅茶滅茶だと悲觀した。「惜しいことを

したなァ惜しいなァー」と全で財布を落した男を慰める樣に一同は慰めてゐた、その樣子が可笑しかつたので、私共は獨りでにフキ出した。瑞枝さんの顏を多くの中に知つてゐたものがあつたと見えて、彼等は切りに耳語を交はした、「ホー」「ホウ」と云つては眼を大きく見開いて彼女に注視した。

私は氣極り惡かつたので、殊更瑞枝さんと放れた所に席をしめた、瑞枝さんは主として學生の二人と物語つた。その物語に他の一同耳を濟まして聽いてゐるものだから、二人は仕舞ひには頰を赤らめて了つた。

輕井澤へ着く。

さァと互に眼配せして立上り、出ようとすると、突然列車中の一人が「わーァ」と云つた、すると此の音頭取りを待つてましたと許り他の一同は「わーァ」と合した、何事か起つたのかと、他の田舍客は唯キョロ〳〵してゐた。彼等は全でシベリアの日本兵が妙齡の娘を發見した樣に列車の窓と云ふ窓から折り重なつて後姿を見送つてゐた。

プラットホームを出ると、瑞枝さんはもう一歩も歩けませんと到頭冠を脫いで了つた。「矢つ張り私は女だわ」と云つて、自分丈け車で歸ると云ひ出した、學生の年かさの方も其處から他へ廻ると云つて直ぐ反對の方向へ別れを告げる可くお辭儀した。

すると瑞枝さんは殊更に其の學生に近寄りながら、

「ね、又お目にかゝりませう、ね」

と、惹き附ける樣な音色を優しく浴せた。

男は餘程初心と見えて、四邊へ氣極り惡く、聊か赤らみながら、

「えゝ」

と、却つて受太刀であつた。

彼が去つて行く姿を見送つてゐると、

「お孃さま」と突然聲をかけたものがゐた、それは僥倖にも昨夜の車夫であつた。

「オウお前か」

と喜びながら、

「それでは、其の車に」

と云ひながら輕く身を換はした、外の車夫連中は「あいつ旨いことしやがる」と云つた風にヂロ〳〵見てゐた。矢つ張り誰れでも年若い女を乘せたい者と見える。

「私共は歩きませう」

斯う云つて殘された三人は線路を傳ふて、ゆるやかに歩を運むだ。

秋天は未だ高かつた。

○

部室へ入ると、瑞枝さんがチャンと坐つてお菓子を喰べてゐる。

「オヤ、君の家へ歸らないのかい?」

と、訊くと、

「此處なら私の家も同然よ、でも此の部屋にゐるのがお邪魔なら私し歸つてもいゝわ」

と、態とすねて見せる。

「歸つちや不可ない、此麼見事な景色を放して堪るものか、碓氷の紅葉より貴女の方がズッと綺麗だ」

「まア大變なことになつちやつたわねえ、賞められたお返へしにお茶でも入れませう」

と、白い手がセツセと動き出した。

「さァお飲みなさい」

「や、濟みませんねえ」

と、云ひながら口に當てる、無鐵砲に歩いて來た故か馬鹿に旨い。

「私し茲でお風呂へ入つて行くわ、汚ないでせう顔が」

「いゝや」

「本當に何う?」

「ぢやもう少し顔を突き出して見せたまへ」

「いやだわ、そんなに近付けたら私の缺點が見られる許りぢやないの。」

「缺點なんか無い顔ぢやないか」

「お世辭ばつかし。全く今日は疲れつちやつたのよ、」

と、机の上へ肱でガクリと靠れる。

「あのお風呂が湧きまして御座います」

と、この時女中が遣つて來た。

「嫂さん私入つてもいゝ?」

「えゝ、何卒」

「ぢや他見男さん、後生だから私から先きに入れて頂戴な」

「女が男の先きにお風呂へ入ると云ふことがあるものか」

「だつて他人の入つた後なら御免よ、私し家にゐてもお父さまよりもお母アさまよりも誰れよりも先きに入るんですよ」

「貴女は岐度一人娘だナ?」

「えゝ」

「だから甘やかしてあるんだね、それがツイ其麼習慣になつちやつたんだね、よしぢや入つて來たまへ」

彼女は立上りながら、

「本當に勝手なことを申まして、さぞお腹が立つでせうけど、何卒ね、ね」

と、につこり笑つて顔色を見た。

「怒るもンか、早く行きたまへ」

「ぢや濟みませんけど」

と、二三歩あるいたかと思ふと、

「あら、手拭が無いわ」

「ぢや私のを持つて行きたまへ」

「そうすると貴方は後で何うするの？」

「どうするつて貴女の使つた後のを頂戴するよ。だから其の手拭でウンと玉肌を拭いて來て呉れよ」

「知らないわ其麼事。……でもお借りして行くわ、使つた後ばよーく洗つ

ますから」

「洗はなくても好いと云ふのに」

彼女は化粧道具抱えて小走りに去つて行つた。暫らく經つた、白粉ほんのりとして遣つて來た。

「ヨー美人」

と、見上ぐると、

「いやだわ」

と、嬉し相に身を搖りながら、挫つかと坐つて、

「まア氣持のよかつたこと！」

それではと今度は私が立つ。

「私の入つてる間に貴女は歸つて了う？」

「かも知れません」

「不可ないなア、私が歸つて來て、たゞ殘るは鼻つく脂粉の香ばかりとは、あゝ淋しいこつた、いとゞ淋しいこつた」

と、態とホロリとした調子で云ふ。

『御安心なさい、大丈夫ですよ、家へ歸つて女中の顏を見てゐる方がいゝか、他見男さんの顏を見てゐる方がいゝかと云つたら、そりや……知らないわ、早く行つてゐらつしやい、いゝお湯の加減よ」

私は味なことを云つた哩と微笑を見せながら廊下から階段へ、階段から湯殿へと下りて行つた。

湯殿は成る程一人しか入らなかつた樣子がアリ〳〵と讀めた。湯は熱かつたけど我慢して沈む、いゝ氣持ちだ、この湯が瑞枝さんの肌を洗つたんだナと思ふ。

上つて來ると、何時か夕日がさしてゐた、女中の春が淋しいだらうと、宿か

ら別荘へ呼びに遣り、三人で仲よく夕餐に向ふ、空腹の故か味殊によし。春はお嬢様が日頃に比して驚く可き食慾を示したので「お嬢様、どうなすつたの、何うなすつたの」と心配相に、且つ又嬉し相に。

膳を下げた時、陽はトップリ暮れて來た。

「さァ何をしませうか」

と、瑞枝さんが考へ込むでゐる時、切りに洋館のサロンから賑かな笑聲が聽えてきた。お嬢さんはヂッと耳を濟ましてゐたが、

「あらッ田口さんの聲が交つてゐるわ、春や一寸見ておいで」

春は急いで下りて行つた。やがて上がつて來て、

「お嬢様、矢つ張り左様でした」

「何してゐらして？」

「澤山の人とトランプして被居いましたよ」

と、答へた途端に、わーアと又さゞめきが聽えた。

「他見男さん行つて交りませうか」

「私の知らない人ばかりだから」

「でも御紹介するわ、いゝぢやないの、ねえ行つて一緒に遊びませう」

と、切りに薦めるので、それぢやと令孃の後から隨いて行く。

「あら先生」

應接室へ入つて行つて田口さんの姿を見ると斯う令孃から聲かけた。

「おゥお孃樣、いつ此方へ」

と、驚いてゐる。

「昨夜遲く」

「少つとも知りませんでした、」

と、答へつゝ横にゐた私を妙な顏して見た。

「この方ね、御存知でせう、奥野他見男先生です」

すると、急に破顏して、

「お名前丈けは」

二人はニコ〳〵挨拶した。

「仲間へ入りませんか、」

と田口さんは云ふ。

「えゝ、交ぜて貰ひませうか」

と、返事する。令孃も入つた、一座は急に賑かになつた。お孃樣、お孃樣と男ばかりだつたので、令孃のモテ方つてない。

トランプが直ぐ始まつた、誰か間違うと、わーアと一同でドッと噺し立てるのだ、始めの間は私は神妙に控へてゐたが、根が彌次氣分に滿ちてゐる私はッイ一緒になつて「わーア。」　トランプに飽きたものはビンボンへ、玉突へ、

それも飽いて來ると、今度はストーブを圍むで雜談に耽ける。夜の寒さは兎も東京などにゐて想像されない烈しいものであつた。

「お嬢樣、私は貴女の顏が見覺えありますよ」

と、畫家の一人は眞中の女王の火に照らされた顏を見詰めて云ふ。

「どこで？」

「三越の食堂で」

「あら、何日？」

「二週間許り前に」

「でも何うして覺えてゐらしたんでせう？」

「美人だつたからでせう！」

すると、突如「わーア」が始まつて、お嫁に貰へ、貰へと一切り騷いで又わーア。

「お嬢樣、この男好きですか」

と、皮肉な質問が交々出る。

「私誰方樣も好き」

「わけて奧野さんが好き」

と、突嗟に誰れやらが云ふと、今度は私に掌の雨がドッと降つて「わーア」

秋の夜の物語はそれからそれへと盡きなかつた。私は何時しか晝の疲勞に襲はれ來出したので、目立たぬ樣にソッと坐を外して一人で部室へ戻つて來て、足に坐蒲團をかけながらゴロリと横になつて、直ぐ眠らうか何うしやうかと考へてゐた。

そこへ瑞枝さんが遣つて來た。

「何うなすつたの？」

と、眉を曇らして私の顏を覗いた。

「疲れたものだから」
「左様？でも默つてお戻りになるて罪だわ」
「惡かつた？」
「惡いわ、私と一緒に彼處へ行つたのなら、一緒に歸るのが當前ぢやないの？」
「濟まん」
「私し勘辨つて欲しかないけど、お心が薄情なんですもの！」
「だつて貴女が折角面白相に遊んでゐるのに、それに皆麼がお孃樣々々々と女王の樣に貴女を圍んでゐたから、それを引張て來るのも色消しだと思ふたから」
「あの方達は何うでも好かつたのに。……でも皆さんは好いお年齡で、ほんに無邪氣な天眞爛漫な方ばかりね。好きだわ畫家さん達は」
私も畫家と云ふものはあゝも淡泊揃ひで磊落揃ひかと驚いて了つた。
「全くですねえ！」

と、共鳴を發した。
二人は火鉢を圍んで坐つた、時々指と指とをいぢり始めた。
その裡、
「何時でせう？」
と、美しい眸が上がつた。
「十時ですよ」
「十時？ぢやもう歸るわ」
「歸るの？」
「えゝ」
「もう少し遊んで行つたら何う？」
「だつて遲いんですもの、それに私だつて疲れてゐるんですもの・・」
「淋しいなァ——」

「私だつて、でもね。」

と、瞼を伏せながら、

「明日早くから又お邪魔してよ、だからね」

「さう、ぢや強いてお止めしないけど」

「ではお就眠遊ばせな、左様なら」

あゝ美しき君よ、今夜は之で歸るのか。

○

翌日も亦令孃に依つて起された。

何うして日を過さうと考へてゐると、主人が又上がつて來て今日は沓掛から千ケ瀧へ御案内しませう、千ケ瀧には星の温泉と云ふ感じのいゝ温泉がありますからと云ふ。千ケ瀧と云ひ星の温泉と云ひ、なんと云ふ詩的な名であらう。

「貴女は？」

と、瑞枝さんを顧みると、矢つ張りその名に惹きつけられたと見えて、

「行きたいわ、だけど少つとでも歩くんだつたら御免よ、昨夜から此のあたゝが痛くて〳〵仕様が無いんですもの」

と、股の邊りを撫で廻はして云ふ。

「ねえ御主人、姫君があんなに弱つてゐますから、何うかして歩かさないで引張り出す工夫が無いものでせうか」

「そのことは御心配なく。汽車で沓掛まで行き、それから十餘町は馬車がありますから。だから此處からステーションまで車でお出になつたらつまり一歩もお歩きにならないでも好い譯です」

「それなら行くわ」

と、瑞枝さん贊成した。

馬車は客に依つて星の温泉宿からステーションまで迎へに出すんだと云ふ、

出して吳れるか吳れぬか一つ訊いて見ませうと云つて主人は電話をかけに急いで階下へ下りて行つた。

その間に準備する。

「恰度いゝ幸ひに東京からも客が來ると云ふので、馬車は出して吳れる相です」

と主人が上がつて來て知らせた。

まだ外に案内役が加はつた、それは土地の若い郵便局員と主人は紹介した。

瑞枝さんが車で一足先きに己れのレンコートを抱えて出て行つて了ふ。時計を見ると時間が僅かなので續いて急いで宿を出る。

町を過ぎて、原へ來、原も過ぎ樣として最早ステーションが間近くなつたと覺ゆる頃、先方から先刻瑞枝さんを乘せた車が息セキ切つて駈け付け、僕等の姿を見るが早いか、「どなたでも早く、早く」と血相變へて云ふ。

「ど、どうしたんだ？」

と、三人は吃驚して立止まつた。

「何うしたも斯うしたも無いもンです、早く、早く」

素破何事の起つたのかと、兎もあれヒラリと身を轉はして己れが乘つて、

「ど、どうしたんだ、女の人に何うかあつたのか？」

「いゝえ汽車の時間が、もう列車が先刻から着いてゐるんです」

「もう汽車が？そりや大變だ、大急ぎ」

之を訊いた殘りの二人はさア乘り遲れたらと宙を飛ぶ樣にと走り出すと、この時前方から又もや汗だく〳〵に一人の車夫が駈けて來て、僕の車夫を見るが早いか、

「ど、どの人を乘せるんだ？」

「あすこへ、そら、そら」

と、前方の二人を指した、その車夫は懸命に漸く追ひついて乘れと梶棒を下

ろした。二人は揃ふて「乗る丈けの時間があつたら」と許り手を振つて走り續けた。すると其の車夫は眞赤に怒つて僕の車夫に、

「乗つて呉れんぢやないか、てめエが態々大丈夫だ來いと云ふもンだから來りや此廢馬鹿を見るんだ」

と、怒鳴つた。

僕の車夫は駈け續けながら、

「あとでお客樣から貰つて遣るから、いゝよ」

と、浴せて過ぎた、振返つて見ると其の車夫は止まりながら未だ何かブツ〳〵云つてた。

二人は相變らず最大速力を出して走つてゐた、見てゐると汽車から下りた鶴屋泊りの客が、ヤ主人がと見て聲をかけ樣と傍へ寄らうとするが、主人は唯セイ〳〵息切つて手を振つて駈けるので、變な顏して見送つてゐたが、驅て汽車に乗り損ねない樣にと解つたものと見えて、

「早く、早く、そらッ」と全で運動會の樣な聲出して面白相に聲援した。

ステーションを見ると、向ふに瑞枝さんは右往左往して、汽車の出發と我々の到着とを睨めッこしてゐる。車が止まるや否や、いきなり飛び下りるが早いか二人に續いて駈け入つて行くと「早く、早く」と切符を渡すが早いか、瑞枝さんは一同を追ひ立てる樣にした。

何う思ふて開札口を出たか、何う思ふて橋を渡つたか、そして何う思ふて汽車の中へ飛び込んだか、それはお互に解らなかつた。四人は均しく顏を見合はして、思はず知らず「オーよかつた!!」とホッと吐息すると同時に列車はビーと動いた。もうスンでの所であつた、人々は瑞枝さんが機轉を利かして既に切符に鋏を入れさして置いた用意周到振りを口を揃へて賞め稱した。

輕井澤から沓掛までの間は別莊にあらずば紅葉なり、紅葉にあらずば別莊な

り、而かも草は悉く黄いばみて風情を添へ、興趣洵に云はむ方なし。

沓掛で下りると、怪しき空模様から一粒二粒雨が落ちて來た。急いで貧相ながらも馬車と名付くるものに乘る。所謂東京の客四人に私と瑞枝さんを加へて六人、案内役の二人は乘り切れなくなつて歩くことにした。

瑞枝さんと僕とは向ひ合せだ、座席が狹いので、膝と膝とがピタリと接觸してゐる、悪路を軌る毎に裂しく動揺する、その時は思はず膝と膝は喰ひ付いた樣になる、二人は氣極り悪げに、又半ば嬉し相に微笑を交はした。

行く道々の風光のよさは近くの輕井澤と全で別の趣きがあつた、黄白の薄や草の中から小川がちよろ〳〵せゝらむだり、竹の樣な眞直な針葉樹が細かい葉を悉く黄色に染めて森をなしたり、手が屆く樣な山々には紅葉の鮮かさ、美くしさ、所々に黑白の牛が暢かに落葉の中に寢込んでゐる樣、實に一幅の畫を見る樣な氣がしてならなかつた。

星の溫泉前へ來ると、瑞枝さんは、

「全で倫敦の秋の郭外でも見る樣な氣がするわねぇ」

と、感激餘つて人目も恥ぢず堅く私の手を握つて云つた。

成程深藍色の池や、小瀧や、血で染めた樣な紅葉や、きら〳〵する許りなる針葉樹の黄ろい葉や、色樣々な山の綾、落葉の色、川や森や、みな一つとして眺めに反くものが無かつた、人々は此の山中、この絶勝のありしかと唯々驚嘆の叫びを上げるのみであつた。

溫泉宿は一軒しか無かつた。

まだ案内役が後から來ないので、

「部室がありますか」

と、おかみさんらしいのに訊くと、

「どうぞ」

と、云ふ。

二人は「それでは」と履物を脱いだ。

案内された部室は脚下に川を見下ろし、前に山を仰ぐの申分のない所であつた　二人は直ぐ縁側へ座敷團を運んで、欄干に身を寄せて、「素敵だねえ、」「瑞西へ行つた樣だねえ」と交々呼いては、魂を浸してゐた。そこへ主人と局員が入つて來た。

「濡れませんでしたか」

「いゝえ大した雨で無かつたものですから」

と云ひながら、

「いゝ部室へ案内してくれましたねえ」

と、宿屋の主人だけに商買柄眼が早い。

此の部室の前の部室が何んだか多勢で如何にも騒々しいので、折柄座敷團を運んで來た女中に何かと訊いたら、近在の工場主が店員慰安の爲め、遣つて來てゐるんだと云ふ。同じ連れて來るにも斯う云ふ自然の風光に親しま相とさせる場主の心根が私には嬉しかつた。

早速湯を探檢して來ると云つて、最先きに私は立上がつた、浴槽は階下の右端にあつた。全で東京で見る錢湯ほどの大きさのが二つあつた。開けて見ると兩方共男が入つてゐた、一方は工場連でガヤ〳〵してゐたから、少ない人數の方で肌を脱ぐ。

湯は熱かつた。熱湯の嫌ひな私は、水を入れるのも外の人に對して、何うかと遠慮してゐると、いつまで經つてもモジ〳〵してゐる姿を見て、

「熱いですか」

と、横に身體を流してゐた男が云つた。

「えゝ」

すると、困つた樣な顔して、

「私も何處から水を入れるのか知りません」
と云ふ。成程云はれて見れば水を入れ相な所が見えない。仕方なしに唇を嚙みしめて次第々々に沈む。
沈むで見たら其麼に熱くも無かつた。
「一體この溫泉には女湯が無いんでせうか」
と、今度は此方から四十男に聲かけた、瑞枝さんの爲めに私は聽いて置きたかつたんだ。
「これが女湯なんです。男湯の方に、あんなに澤山人がゐるもンですから、ッイ此方が空いてゐたので、」
「左樣ですか」
と、私は、あとで瑞枝さんが此處へ來た時、男が一人も入つて居なけりや好いなと餘計な所へ心配をした。その裡一人出、二人出、遂に私も出て了つた。

「オウ瑞枝さん、早く湯へ行つて來たまへ、誰もゐないから」
と、部室へ戻ると、急がす樣に斯う云つた。
「さう？ぢや行くわ、お湯どこ？」
「私が案内しませう」
と、局員が立つた。瑞枝さんは其處にあつた私の手拭を持つて隨いて行つた。
あとは主人と私きり、
「ねえ奥野さん、あの山の後の方が例の別莊地です」
と、主人が云ふ。
「ホウ、左樣ですか、ホウ」
と、私も急に想ひ出さゞるを得なかつた。
去年の九月であつた、この邊一面の所有者なる東京の某氏が智識階級一百名に限り、一人百坪宛無代提供すると云ふことが、東京市社會局に依つて發表

された時、私は豫ねてから憧憬仕切つてゐた輕井澤の近郊と云ふので何は兎もあれと早速申込んで置いた。所がその後慾張り連中が非常に多かつたものと見え、百坪無代とは今の世に此麼難有いことは無いと許り、われも〳〵と大學の教授やら名立たる代議士やら、社會に名の知れた人々の申込みで滿たされてゐた。私は先づ兎ても駄目だらうと觀念してゐた。

ところが其の後或る新聞に左の人々は確實に所有權を得ることは我社の密かに探査した所だとあつて六名の名が書いてあつた、その裡の一人に幸ひ私の名を見出した。それを見た私はもう〆めたナと思ふた。

最初この事は大學教授三名が審査員になつて人選する筈であつた、そして締切つた、開けて見た。すると申込んだ人々は上記の通り悉く知名人士ばかり、何うして人選すべきか途方に呉れた矢先、審査員は屹度情實に絆されて審査を左右にするに違ひない、抑々何に依つて標準を定めるかとの非難が、まだ審査

に係らぬ前に起つた。

審査員は途方に暮れた、一層これは抽籤に定めた方が一番安全だと許り、總數七百幾名を其の方法にして了つた。それが發表された時不幸私もフリ落されてゐたのみならず、六名と云ふ六名みな駄目に終つた。

然し其の後私はさして後悔もしなかつた、何故ならば一年に僅か一ケ月や二ケ月の住居の爲めに多額な建築費を拂ふことは考へて見ると馬鹿らしい話である。それよりも若し其れ丈けの金があつたら洋行でもしたら何麼にいゝかも知れぬと思はれた、いろ〳〵捻つて見た所結局幸であつたかも知れなかつた。

貰つた人の中にも難有迷惑を感じてゐたものがあるらしかつた、現に鐵道院の細野君に逢つた時細野君の友人石井君も實は抽籤で貰つたが、誰れか欲しい人があるなら遣つてもいゝと云つてゐたと私に話してゐた。

その別莊地を今主人が指したのである。

二人は其の事に就いて互の意見を交換してゐる所へ、瑞枝さんが上がつて來た。

「まァいゝお湯ねえ、よかつたわ」

と、ポーッとした上氣で顔がホーッと赤らむでゐた。

そこへ女中が晝飯を運んで來た、私も瑞枝さんも食慾更になかつたので、案内役の二人分丈けを注文してあつたんだ。

「さ、どうぞお喰り」

と、勸めても兎角遠慮勝ちであつたので、氣を利かして瑞枝さんと私は部室を外して、外を少し散歩して見ませうと云ひながら、傘と足駄を借りて外へ出た、相合傘である。

すると何時の間に此の姿が眼に着いたのか部室と云ふ部室から客と云ふ客は悉く縁側に出て羨し相に見詰めてゐた、流石に都びた姿と威容に恐れを爲して

てか誰れ一人冷評かしを浴せるものが無かつた。時々後を振返へると口々に耳語を交はして見守つてゐた。

二人は池の邊りから、落葉を踏むでさゝやかな坂を登つた、すると淺間の山容が突如に眼の前へ展げられた。

「まァー」

「ウォー」

二人は吃驚して了つた。

雄大なる山の頂きから麓まで、麓から又足元まで一目瞭然、天地濶大である。谷を越へて丘あり、丘を越へて山や森があつた、秋色は乾伸に横溢してゐた、所々の瀟洒な建物皆別莊らしい。

「全で新婚旅行みたいだわ」

と、一しきり悅に入つた後で、ゆる〳〵と部室へ戻つて來ると、案内役の二

人は何時しか食事を終つて、ピンポンに夢中になつてゐる、私も其の中へ交る、瑞枝さんは見てゐる、浴客は何時しか蟻の様に集まつて來た、ピンポンを見て呉れるんだと思ふてゐたら、その眼は悉く瑞枝さんに集まつてゐた。瑞枝さんは氣極り悪くなつたと見えて、愴惶として引上げて行つた。

雨は止むと見えて止まなかつた、ポツリ〳〵思ひ出した様に降つてゐたので千ケ瀧へは到頭行かれなかつた。

夕刻前、主人の知合の某畫家と合計五人、「ゆつくり行きませう」と宿を出た。其の畫家は畫を畫く傍ら銃獵に興をやつてゐるんだと云ふ。此の時も山鳩を四羽も下げてゐた。

「雉がゐませんでしたか」

と、訊くと、

「ゐましたけど、銃身を壞して了ひました、殘念でしたよ」

と、口惜し相に肩に掛けてゐた獵銃を顧みながら云つた。

矢つ張り私と瑞枝さんは相合傘であつた、斯うなると孰方も其れが當前の樣に思ふて了つた。

沓掛のステーション近くへ來ると、構外に學生の一團らしいのが口々に何か云ひたゝて此方を向いてゐるのに氣が附いたので、私は慌てゝピタリと歩を止めて、

「君、君」

と、前へ行く局員さんを呼んだ。

「君、此處へ入つて呉れたまへ」

「何うして？」

「何んだか彼處にゐる連中が冷評かす樣な氣がしてならぬから」

「左樣ですか」

と云ひながら、

「お嬢様、私が代りますよ」

「えゝ、どうぞ」

と、瑞枝さんが云つた。

私が身を引くと、入り換り局員さんが傘の中へ入つた、そして二人で歩いて行つた。

果して一團から様々な言葉が出て來た、「イヨー御兩人！」「待つてました！」「ヨウ仲よいところ」局員さんは傘を下にして注視を避けながら、後を向いて私の顔を見ながらニタリと笑ふ、私も釣られて「矢つ張り左様だろ」と許り頬を崩した。

近付いて行つて其の一團をよく見ると、意外や昨日熊ノ平から輕井澤へ來た列車の中にゐた學生連中だ、先方も奇遇だらうが此方もオヤ〳〵だつた。

汽車は前日で凝りてゐたから特に彼等を先きに乘せた後、別の列車を目掛けて乘つた、一團としてはさぞかし掌中の玉を失ふたかの感あつたに違ひない。

滿員であつたので、洗面所の前で固りながらチョコレートを別けて話合つてゐた、その裡輕井澤へ來た。

雨が少しく非道かつた、私と瑞枝さん丈けが車に乘つた。

宿へ着いた頃、日はとつぷり暮れて來た。

直ちに晩餐、それが濟むと又昨夜の如く畫家連中と夜の更ける迄遊んだ。

「美しき君よ、今夜も之で歸るのか」

と、瑞枝さんが迎へに來た女中に連れられて宿を出て行く時私は密つと呟くと、彼女はホロリとした顔で見返つた、けれども遂に去つて行つた。

○

次の日。

私が東京へ歸ると云ひ出すと、瑞枝さんもぢや私も一緒に歸るわと云ひ出す。そして來る時も一緒、行動も食事も殆んど一緒だつたから序に最後の幕切れも一緒にさして下さい、その方が後日どんなに美しい想出になることでせう、恐らく輕井澤を浮べた時必ず貴方を思ひ、他見男さんを想ひ出した時又必ず輕井澤を浮べるでせう、ねえ左樣さして下さいませんかと賴む、私は潔よく承諾した。

出發用意を整へた。旅行する毎に必ず忘物をする私は今度こそはと注意した。

すると剃刀が見當らない。ハテと思ひながら總ゆるポケットと云ふポケット鏡臺の抽出から、座敷圍の下から、遂には一度も開けなかつた押入まで搜索の手を擴げた、了ひには階下であるまいかと應接室から湯殿から洗面所から、凡そ一寸でも歩いたと思はれる所は片ッ端から詮索した、それでも遂に見當らなかつた、己れはガクリとして了つた。そして何日も旅行する時定まり切つた樣に剃刀の携帶を忘れて了ふから、今度こそはと注意して偶に持つて出れば此の仕末、何んと云ふこつたいと自分の愚さを腹立しくなつた。

昨日の朝であつた、己れが湯殿へ來て髭を念入りに剃つてゐると、一緒に隨いて來た瑞枝さん傍にヂーッと見てゐて、「上手いわ」と賞めながら、「お濟みになつたら私の襟足を剃つて下さらない？」と云ふ。お容易ことだと承知して、私は直ぐ彼女を蹲ませ剃刀逆さに取上げて、石鹸で雪よりも白い彼女の襟を泡高く塗りながら、「やアモジャ〳〵薄い毛が生えてゐるぞ」と業山相に云つて、

「いゝか、剃るぞ」

と、構へた。

「痛かないの？」

「少し位痛いかも知れない、然し大したことが無いだらう」

と、云ひながら切つたら大變と念入りに剃刀持ち直し、スーッと撫でる樣にした、餘んまり優しく手を下ろした故か少つとも毛が剃れてゐない、これぢや駄目だと、今度ば小々力をこめて、ザク〳〵剃り始めた。

「ちよ、ちよ、ちよつと待つて下さい、まア痛い、痛いわ」

と、瑞枝さんは泣き聲交りで哀願した。

「少し位我慢しなくちや、澤山毛があるよ」と面白かつたので、半分おどす樣に云つた。

「左樣?」

と、澤山毛があると聽いて、勇氣を再び呼び起し、

「ぢや後生だから密つとね」

「ウン」

私は又もや力をこめて剃つた、彼女は痛い〳〵と連呼して止まなかつたけど、

も少し〳〵と云ひながら到頭みんな剃り終つた。

「もうよし」

「もうよしも無いことよ、なんて痛いんでせう、オー痛い」

と、脹れ物に障る樣に、密つと剃つた所へ手を當てながら、

「皮が切れたんぢやないの?」

「いゝや、そんな拙手ぢやない」

「ぢや赤くなつてゐない?」

「そりや……ホンの少しばつかし、然し綺麗になつたよ」

實際は眞赤に脹れふくれてゐた。

「オー痛かつた。その剃刀少つとも剃れないんでせう」

「イヤ其麼事はない、若し剃れないんだつたら私の髭が此麼に綺麗にならん筈だ」

「左様？」

と、疑ひを漸つと解きながら、

「私に一寸此の剃刀を借して頂戴な」

「何うするの？」

「顔剃るの」

「剃つて上げませうか」

「もう澤山、顔なら私し剃れますから」

「ぢや遠慮なく使ひたまへ」

と、云ひながら一旦二階へ戻り、いつ迄經つても戻つて來ぬので、何うしたのかと再び階下へ下りて來ると、瑞枝さんが顔を洗つてゐた。剃刀はと見ると湯殿に置いた儘になつてゐた。

若しや瑞枝さんが片肌脱いで顔を洗つた後、ツイ之を持つて來ることを忘れ

たら大變と、私は外の物は其の儘にして剃刀丈けを持つて其の場を外した、そして確かに外の場所に置かずにレンコートの中へ仕舞ひ込むだ樣に思ふ、それが無いんだ。だから不思議なんだ、私はそれを想ひ起したものだから若しや昨日湯殿から上る時外の場所へ寄途したんぢやあるまいかと、偖こそ彼方此方探したんだ、それでも無いとはハテこりや怪しい。

して見れば第一レンコートが怪しい。

レンコートと云へば昨日確かに内ポケットへ仕舞ひ込んだらしい記憶が薄おぼろながら頭腦にある。あれを持つて出たのは昨日沓掛へ行つた時より外にない。して見ればその途中落したのか知ら。

落したとすると怪しい、私はあの時ズツとレンコートは確つかり身體に着て許りゐた筈だに。それが落ちる筈がないんだ、落したとすれば大方どの邊だらう、合點がゆかぬ。

さうだ!!!昨日は宿を出發する時からして既に時間が遲れてゐた、だから瑞枝さんが車に乘る時ボーンと放り渡す樣にコートを手渡した、瑞枝さんは其れを掴むだ儘で車を走らせた、其の時のレンコートは逆さになつてゐたかも知れない、横になつてゐたかも知れない。

それからエーと……左樣だ！汽車に乘つた、その時私は瑞枝さんからレンコートを受取つた儘腋に抱えてゐた、あの時落ちたかも知れない。それから馬車に乘つた、矢つ張り私は手に持つてゐた、惡路毎に身體が飛び上がつた、その時スルリッと拔けたのかも知れない。

溫泉宿へ着いた、靴を脱ぐ時ボーンと横へレーンコートを打つちやりにして案内に連れて急いで二階へ上がつた、あの時かも知れない。思ひ出せば「あの時」が澤山多過ぎて、何處と云ふ的確な判斷が附かない、己れは困り切つて了つた。

外の剃刀なら兎も角あの剃刀を手に入れるまでには隨分手數がかゝつてゐるから、己れは何んと無しに惜しいのだ。

私の使つてゐるのは西洋剃刀だ、從前西洋剃刀は幾度も買つたが、少つとも切れないので、その度に床屋へ持つて行つた、すると床屋は「素人の方は刄を見ることをお存じないから飛んだものを掴ませられますねえ」と笑つた。或日例の如く床屋へ來て又剃刀の話が出た時に「君の方で買ふのを一つ別けて呉れないか、そしたら刄の質も解るらうし、その剃刀が永久に使へるか何うかの見當も附くだらうし、萬事に文句が無いから」と云ふと「ッイ先刻賣りに來たんですが、惜しかつたなアー」と慨嘆しつゝ、「それぢや此の次來た時に澤山の中から選つて置きませう」「どうか賴む」と云つて其れから二週間程經つたらう、「まだかい？」と覗くと、「えゝ手に入りました」と云ふ、「いゝのかい？」と訊ねると、「私共が選んだんですから」と二の句を吐かせない、「もう總つかり砥

いで置きましたから」と云ふ。そして預けて置いた金の釣錢を出したから、それは周旋料だからと強いて受取らなかつた。家へ歸つて試みに當てゝ見ると成程切れる、及當りもいゝ、私は喜んだ。

それを失ふたんだ、だから私が若し手に入れ樣とする時には東京へ歸つて直に床屋へ賴み、床屋が剃刀屋から吟味し、次で砥ぎ、渡すと迄に何うしても廿日間の日數を見なくちやならん、私は近頃隔日毎に顏を剃るから、剃刀が無いとすれば勢ひ十日間と云ふものは床屋へ厄介にならねばならぬ、それも入つた わ直ぐ番だわと云ふならいゝが、拙手間誤つくと一時間二時間と待たされることがある、その時間が第一惜しい、兎ても氣短かな己れの性分に合ふ筈が無い、床屋と云へば平生から大嫌ひなんだ、その大嫌ひな所へ隔日に日參とはこりや益々以つて不可ない。

そんな事を思ひ出して來ると、如何にも紛失したことが後悔の種になつてくるんだ。

私は座敷の眞中に兩手を頭の下へ敷きながら悲觀してゐた。

「何うなすつたの、御氣分でも惡いの？」

「いゝや、剃刀のことが心配になつて！」

「貴方も男らしく無いわねえ、探す丈け探し、それで無いものとしたら潔よく諦めた方がいゝわ」

如何にも左樣に違ひない、けれども私には何うしても其の諦めが附かなかつた。

「さ、汽車が遲くなりますから……オヤ車夫が前へ來てゐますよ」

「フーム」

不承無精立ち上がつた、そこへ主人が來た。

「お歸りになるんですつてね」

「えゝ」

「急に又お歸りになることになすつたんですね、あゝ又淋しくなつて來るのかな」

と、主人は悲觀した。

「あッ先刻女中から聽いたんですが、剃刀が無くなつた相ですね、何うしたんでせう？」

「屹度昨日どこかで落したに違ひありません、若しあつたら濟みませんが、電報で一寸知らせて下さいませんか、で無いと明日にも買つて了うかも知れませんから」

私は腹の中で、何うしても無いものであつたら、今後は斷然西洋剃刀は止めて近頃流行の安全剃刀を早速三越で買ふことに定めて了つてゐた。

「承知致しました、若し猶私共の方も一應探して見まして若しありましたら早速」

と、主人は答へた。

玄關へ下りて行くと休んでゐた車夫は一さいに立上がつた。女中や番頭は悉く並んで見送つて呉れた、一昨日一緒に碓氷へ登がつた中學生も慌てゝ出て來た。

左樣なら、左樣なら、車は動いた。

左樣なら鶴屋、あたゝかき鶴屋!!

○

「ねえ貴方」

と、前方へ走つてゐた車を突然止めて、瑞枝さんは振向いた。

「お菓子買つて行きませうよ、そして汽車の中で喰べませうよ」

「よしッ……オイ車夫さん菓子屋の前へ來たら止めてくれ」
「ヘイ」
郵便局の前へ來て車は止まつた。
「あすこがお菓子屋ですから」
「左樣か」
と云ひながら、私が下りると、
「あッ私も下りるわ」
と、瑞枝さんが云ふ。
「君はいゝぢやないか」
「いゝえステーションから家へ電報を打たうと思ひましたけど、恰度幸ひだから此處で打つわ」
と、同じく下りて其の儘郵便局へ入つて行つた。

チョコレートを買つて待つてゐると、瑞枝さんは出て來た。
「貴方、昨日ゐらした方がゐてよ」
「ホウ」
と云ひながら私も覗く樣に急いで入つて行くと、
「お歸りですか」
と云ふ。
「急に」
「來年是非又。お待ちしてゐますから」
「オウ。ぢや失敬」
「左樣なら」
再び車上の人となる。瑞枝さんは土地に馴染の人が多いと見えて、あちこちから「あらお孃樣」と挨拶の顏が出る、そして私の顏も序でに不審相に見詰め

てゐた、屹度お婿様と感違ひしたかも知れない。

停車場で女中の春に切符を買はす、その間ポツネンとしてゐる時フと告知板に眼がついた、退屈しのぎに讀んでゐると、次の樣な文句が眼に入つた。

よし子、お前にはもう逢はれないだらう、私は屹度成功して歸る、身體大事に。久武。

屹度この中には何か悲しむ可き事柄がまつはつてゐるに違ひない、此麼小さい田舍の町にも人世の波瀾が窃むでゐるかと思ふと、竦として來る。

「瑞枝さん、之れ讀んで見たまへ」

と、指した、瑞枝さんは讀んだ。

「何うしたんでせうね、お前にはもう逢はれないだらうとは身が詰る樣ね」

と、同情した。

開札口があいたので出て行く、暫らく汽車が來なかつた。その時又愚痴ながら剃刀の事が思ひ出されて、ひとりで氣が沈むで行つた、男らしくもない、男らしくも無いと思ひながらも何うしてもカラリとした氣持ちにはなれなかつた。瑞枝さんは「貴方又剃刀のことを思ふてるんでせう、もうお止し遊ばせな、仕方が無いぢやありませんか」と氣を勵ます樣な晴れやかな聲を出した。

列車が來た。動いた、さらば美しき輕井澤。

熊ノ平から紅葉の枝を手にした父娘が乘つた、娘は廿歳を過ぐるであらう、小豆色の羽織がよく似合つてた。列車の中には學校の女教師らしいのが幾年振りで逢つたかの樣な弟と睦まじく膝組合せながら物語つてゐたのもあつた、奥樣の美しい夫婦連れもゐた。

そろ〳〵お菓子を紙から出して口に入れながら、

「貴方、柿喰べたくない？」

「欲しいよ」

「この邊のステーションに賣つてゐないか知ら」
「さァ何うだか、横川まで來たらあるかも知れない」
その横川へ汽車が着いた、窓から早速首を出したが果物賣が見當らなかつた。
「無いわねえ」
「欲しいなアー」
列車が動いた。
「オヤ！」
と、瑞枝さんは小さい聲で叫び、そつと私の耳へ口を當てゝ、
「前の棚を御覽」
何んだらうと仰ぐと、二十五六の脊廣を着た男の上の棚に見るからに見事な大柿が、籠から轉がり出てゐるのが眼に付いた。
「オウーホツ」

と、瑞枝さんを見て笑つた、瑞枝さんも其の男の顏と柿と見較べて笑つた。
私は小さい聲で、
「この菓子を一つ如何ですと勸めたら何うだ、そうすりや屹度その裡先方からも一つ如何ですと云ふに違ひない、態とだから今のうち大きな聲で柿が欲しいくと云つてゐて機を見て出さうぢやないか、男の私が勸めると野暮臭いから、一つ柔かく女の聲で云つたら何うだ？」
「私が勸めるの？春ぢや不可ない？」
「春ぢや兎ても柿を寄越し相もない」
「だつて私し其麼事が」
「出來ない？」
「えゝ」
「左樣？」

と云つて、

「旨相だなア」

と、再び仰ぐ、そして密つと膝をつゝきながら、

「早く菓子を勸めつたら」

「でも先方が下さらなかつたら何うするの？」

「そしたら柿を睨み付けて遣らう」

「ホッホヽヽ」

「フッヽフッヽフッ」

二人は舉つて笑つた、眠りかけてゐた其の男は何事ならむと屹と此方を見た、

そして何故かニヤリと貫ひ笑ひした、得體の知れぬ笑ひ方だ。

「私が嘗て此麼經驗がある」

と、急に話を代へて瑞枝さんに次の話を物語つた。

鎌倉へ横濱の絹川と云ふ醫者と海水浴に行つた歸りだつた、鎌倉のステーションに一人の素敵な美人がゐた、どうだ彼の美人と同じい汽車に乘らうぢやないかと絹川が云ふので、よし來たと應じながら、僕等二人は普通の手段では兎てもモテ相ではないから何うかして急速にモテる方法を考へ樣ぢや無いかと首を捻つた擧句、二人はッイ先達洋行から歸つたばかしの顏付をしやうと云ふことに一決して、汽車が來るが早いか、急いで其の女の後から續き、恰度その美人が占めた座席の前へ幸ひよく座つた。

汽車が動いてから、僕は絹川に、

「君あの時巴里まで來てゐたのなら何故倫敦へ寄つて呉れなかつたんだい、ケンブリッチ大學へ來て日本人の僕に逢ひたいと云へば直ぐ解つたのに」

「ッイその何んだ忙しかつたものだつたから」

と、突然だつたので絹川の奴め一寸シドロモドロになつて、漸つとのこと、

「どうだ英國の方が落着いてゐるだらう？」
「歸國して見ると痛切に其の感深いよ」
「左樣だらうナ。オヽ、左樣、左樣、ピカデリーから繪ハガキ有難う、素敵らしいね、彼處は？」
「なアに、君のゐた巴里の方がいゝかも知れぬ、君は何處から巴里へ廻つたんだ？」
すると絹川め之にはギヤフンと參つたと見えて、眼で其麼難かしい質問をするもんぢやないよと白黑させて顏を顰めた。
「地中海からマルセーユへ上陸したんだろ」
と、己れは仕方なしに急場を救ふ爲めに入智恵した。
「そ、そうだ」
と、ホッとして、

「巴里の夜は素敵だよ、華かなカフエーや、巴里ッ子の美しさつたら」
と、誰でも知つてることのみ振り翳してゐる。
「セーヌ川の流れは何うだ？」
「いゝよ、月に照られた夕べと云つたら無いよ、一遍君を呼びたかつたなア！」
と、今度は逆襲して來る。
「日本はまだ〳〵駄目だね」
「較べものにならんね」
などゝ切りに洋行顏して先方の注意を惹く可く努力してゐたが、美人は眼の玉一つ動かして呉れなかつた、之れぢや未だ〳〵吹聽が足らぬと許り吹くわ、吹くわ。すると平塚へ汽車が着くとフイと美人は下りて了つた。二人は全で鳶が餌を落した樣に悲觀して「日本どころか君が駄目だよ」と交々罪を被せた後、
「一體君は何うしてマルセーユだの、セーヌ川だのと佛蘭西のことに詳しいん